

橋本高等学校

実施日時	令和6年11月5日（火） 6限・7限
参加者	生徒201名、教職員14名、地域住民等15名 計230名
実施内容	救命救急心肺蘇生法・AEDの使用法、簡易担架による搬送法・止血法、消火活動、パーティション・マイトイレ作成

ねらい

- 1 防災意識の向上と地域防災の担い手を育成するため。
- 2 本校が地域の避難場所に指定されていることを踏まえ、自助・共助・協働の精神に基づき、社会貢献できる人材を育成するため。

主なプログラム

- 1 救命救急心肺蘇生法・AEDの使用法
- 2 簡易担架による搬送法・止血法
- 3 消火活動
- 4 パーティション・マイトイレ作成

概要

- 1 全校生徒による避難訓練の実施後、各クラスを4班に分け、上記プログラムを各25分でローテーションし、訓練を実施した。
- 2 全行程終了後、全体での振り返りを行い、各ホームルーム教室でアルファ化米と水を配布し、感想文を記入した。

参加者の感想

- 実際に体験することで、より具体的に防災への知識が深まり、有意義な時間であった。
- 万が一の状況に備え、何をすべきか、何ができるのかについて、真剣に考えることができた。

•自分の身を守ることはもちろん、今回学んだことを生かして、地域に貢献したいと思う。

成果と課題

【成果】

今回も橋本市危機管理室の職員や自衛隊、消防士の方々の協力を得て、滞りなく防災スクールを実施できた。その結果、全国や地域の防災の現状を踏まえたより具体的な訓練につながり、非常に大きな成果があった。また、生徒が実際に体を動かして、主体的に訓練に取り組んでいたことも大きな成果である。

【課題】

数名の地域住民の方が来校されていたが、未だ合同で訓練を実施するという形にはなっておらず、学校の取組を地域にアピールしたいと考えている。また、毎年同じような展開にならないように、防災の現状を踏まえ、工夫を凝らした防災スクールにしていきたい。

紀北工業高等学校

実施日時	令和6年10月20日(日)	11月6日(水)
参加者	地域住民等約50名、生徒8名	生徒387名、教職員60名
実施内容	地区防災訓練	防災避難訓練

ねらい

- 1、生徒及び教職員の防災意識の向上を図るとともに、災害発生時の基本的行動を学習する。
- 2、避難行動をする上での課題等を発見する。

主なプログラム

- 1、通報訓練
- 2、シェイクアウト訓練
- 3、避難訓練
- 4、橋本市消防本部による講話

概要

橋本市消防本部と連携し、訓練用緊急地震速報にあわせ、シェイクアウト訓練とその後校内で火災発生の想定の下、全校生徒がグラウンドへ避難する訓練を行った。

参加者の感想

- ・訓練を通じて、防災意識が高まりました。
- ・「避難経路の確認」ができました。
- ・消防職員の講話がためになりました。

成果と課題

【成果】

- (ア)地震発生時の安全確保の方法を確認できた。
- (イ)地震発生時の避難や火災発生時の消防署への通報方法等を確認できた。
- (ウ)本校内の消防用設備の基本操作方法を確認できた。

(エ)「地震発生→火災発生→避難行動」の順で、避難経路の確認及び命を守る行動の確認ができた。

【課題】

消防署職員との事前の打ち合わせが十分にできなかったことが課題である。



山田地域防災訓練 毛布で担架



防災避難訓練 身を守る行動



消防署職員の方の講話

紀北農芸高等学校

実施日時	令和6年12月19日(木)
参加者	生徒60名、教職員15名 計75名
実施内容	救命救急講習、 α 化米炊き出し訓練、災害避難ゲーム

ねらい

地震・火災等の有事に備え、防災知識・技術を高めることを目的とする。

主なプログラム

- 1 救命救急講習
- 2 α 化米炊き出し訓練
- 3 災害避難ゲーム

概要

- 1 伊都消防組合に依頼し、救命救急講習をしていただいた。心肺蘇生法やAEDの使用方法等を実演していただいた。また体験することで学びが深まった。
- 2 炊き出し体験を通して、被災した際の食事や自身の行動について考えさせることができた。
- 3 災害避難ゲームを通じて、大地震が発生した際の備えや命を守るために必要な準備や行動を学んだ。

参加者の感想

・救命救急講習

(1年女子) いざとなった時にすぐに対応できるようにAEDのある場所を把握しておくことが大事だとわかった。

(1年女子) 難しそうだった。その時になったらパニックになってできなさそう。

(1年女子) 講習をうけて一からAEDを学べて良かった。落ち着いて扱える自信はないけど、どのような感じなのか分かったから頑張りたい。

・炊き出し体験

(1年男子) 保存食にしては美味しく、米がもちもちしていて味も濃く、量も多くて良かったです。

(1年男子) 食べる前は災害が起きたときに食べるものだと思っていたので、あまり美味しくないと考えていたけど、味が濃くて美味しかった。

・災害避難ゲーム

(1年男子) 必要なものをしっかり準備して逃げなければいけないと思った。

(1年男子) 災害のことを学びながら楽しくできるのが良かった。

(1年男子) いるものといらないものを事前に決めて用意しておくのと災害があったときにすばやく逃げる事ができるとわかった。

成果と課題

【成果】

今回の防災スクールで学んだことを生かして地震に直面した時、どのように行動しますかという質問に対して、「事前に防災グッズを準備して避難経路を確認しておく」「災害避難をしている際に大けがをして意識がない人がいた場合、教わったことを生かせるようにしたい」「自分の命を守りながら、友達のとかの命の安全も確認する。倒れている人がいたら、助けたり協力したりしたい」などの感想を書いた生徒が多く、「自助」「共助」の大切さを学んでいた。また、被災した際に家族とともに助かるために、避難経路や避難場所の確認などの事前準備や話し合いが大切であると気付いた生徒も多く見られた。

今年度は防災スクールとは別にかつらぎ町福祉協議会と連携し、2年生を対象に防災セミナーを開催した。9月には日本赤十字社の講師による防災・減災セミナーを開催していただき、地域住民の方々とは本校周辺のハザードマップの作成を行った。その際に、「本校周辺の危険箇所などを知ることができ、今後気をつけて登校したい」などの意見を聞くことができた。12月には地域の企業による、被災時における車椅子の利用方法や注意点を教えていただいた。「車椅子は小さな段差でも操作が難しく、障害になることがわかったので普段から困っていたら助けられるようになりたい」という意見も出ており、「自助」「共助」の力を高められたと考えられる。

【課題】

今年度は救急救命講習や災害避難ゲーム、炊き出し体験などを行い、「自助」や「共助」を学ぶことができた。しかし、実際に災害が発生した場合、本校が避難所になり、地域の方が来校することも想定される。その時のために、地域の方々ともっと連携を増やし、避難所の運営・設営などの体験を協力して行うことで、さらに「自助」「共助」の力を高めることができればと思う。

笠田高等学校

実施日時	令和6年11月13日(水) 10:30~12:10
参加者	生徒2学年129名、教職員12名 計141名
実施内容	防災講話、心肺蘇生法、担架搬送法、止血法、ロープワーク

ねらい

- 1 防災意識を高め、自助・共助の精神を涵養し、自分の命を守り、地域防災のリーダーとなる生徒を育成する。
 - 2 実践的な訓練を実施し、災害避難時に役立つ技術を習得する。
- 2 心肺蘇生法
看護師資格者による心肺蘇生の概要及び実施要領の提示・実習。
(AED・心臓マッサージ)

主なプログラム

- 1 防災講話
- 2 心肺蘇生法
- 3 担架搬送法
- 4 止血法
- 5 ロープワーク

概要

自衛隊和歌山地方協力本部の指導のもと以下の内容を実施。

- 1 防災講話
「自分たちができる身近な防災」



- 3 担架搬送法
毛布及び約2mの棒を2本使用し、応急担架の展示・説明及び実習。



4 止血法

止血及び骨折時における処置要領の説明及び実習。



5 ロープワーク

1m～2mのロープのもやい結び等の説明及び実習。



いです。

- 少しでも自分が勇気を持って行動すれば、いざという時に自分も誰かの役に立つことができると分かりました。
- 実際に災害が起こった時の行動について、周囲の安全確保など救助をするための順序があることが印象に残っています。

成果と課題

【成果】

昨年度に引き続き防災スクールを2学年の生徒のみであるが実施できたことが成果。また、参加した生徒は前向きに、真剣に取り組んでいる姿に頼もしさも感じた。

【課題】

地域住民の方々や近隣の小中学校と連携した取組となっておらず、地域全体の防災や共助の意識を高めるまでに至っていない点が課題である。

参加者の感想

- 地震が起きたときに、「自助」「共助」が大切で周りの人と協力して身を守ることが重要だということがよく分かりました。
- これまで授業で知識は学んでいましたが、実際に行動して学びました。新しく学んだ知識もあり、これから活用していきたい

粉河高等学校

実施日時	令和7年1月29日(水)
参加者	生徒239名、教職員23名 計263名
実施内容	マイトイレ作り、防災ハンドブックでの学習、パーティション体験 避難経路・避難場所・ハザードマップ確認、アルファ米の配布

ねらい

- 1 日頃の備えや訓練の大切さを学ぶ。
- 2 災害発生時に、地域・学校・家庭等で高校生としてできることを理解し、周りの人を助けることができる力を身につける。

主なプログラム

- 1 マイトイレ作り
- 2 防災ハンドブックによる学習
- 3 ハザードマップの確認
- 4 パワーポイントによる学習
- 5 パーティション体験
- 6 水・アルファ米の配布と説明
- 7 振り返り

概要

- 1 新聞紙を使ったマイトイレの作り方を学び、災害時のトイレの重要性を知る。
- 2 防災ハンドブックを見ながら、防災学習をする。特に「災害時自宅にいた場合の注意点」「外出先にいた場合の注意点」「家族で事前に話し合っておくこと」などを中心に学習する。

- 3 「ハザードマップポータルサイト」で自身の生活圏内がどの災害時に危険なのかを確認する。
- 4 パワーポイントを用いて、能登半島地震の概要や南海トラフ地震の被害予想を確認し、非常持ち出し袋の中身や避難に必要なものを確認する。



- 5 体育館でパーティションを自分たちで組み立て、実際に中で寝転んでみるなど、思ったより狭く感じたり、隣が気になったりを体験する。



6 アルファ米と水を配布し、本日の感想を書く。

参加者の感想

・防災について家族と考える時間を作りたいと思った。

・日頃から気を付けておくことや、避難場所を理解しておくことが大事だと思った。

・まずは自分の安全を！それから年輩の方や子どもたちの避難も頑張りたい。

・実際にパーティションの体験ができてよかった。プライバシーが無いように感じた。

・対策が全然できていないので、非常用袋など用意しておこうと思った。

・避難所では毛布がないと凍えてしまいそうだった。

・粉河高校に避難する場合は通学路が狭く塀が倒れてくる可能性があるため遠回りになっても、大きな道から避難しようと思った。

成果と課題

【成果】

いつ大きな災害が起きてもおかしくなく、その際は自分や家族の身を守ることはもちろん、地域の一員として率先して行動しなければならないという意識付けができた。

また、生徒は積極的に活動し、防災に関する経験を積むことができた。体育館で実際にパーティションを組み立てて中に入ってみる体験ができた。

【課題】

学びたいこと、体験したいことが多く1時間では時間が足りなかったため、次年度は2時間取ることができるよう働きかけていきたいと思う。

那賀高等学校

実施日時	令和7年1月24日（金）
参加者	生徒272名、教職員18名 計290名
実施内容	防災講話、止血法、担架搬送法、ロープワーク、救急救命講習他

ねらい

- 1 令和7年1月宮崎県での地震発生後、すぐの実施となり、さらなる防災意識の高揚を図ることをねらいとした。

主なプログラム

- 1 防災講話
- 2 止血法
- 3 担架搬送法
- 4 ロープワーク
- 5 水の採取・救難信号
- 6 救急救命講習
- 7 避難所運営ゲーム

概要

- 1 初めの30分間は、全体で防災講話。
- 2 主なプログラムの2～5を各20分実施。
- 3 主なプログラムの6、7は各100分実施。
各プログラムは、岩出市役所、自衛隊、那賀消防組合中消防署の協力で行われた。

参加者の感想

- ・どの内容も実際に行い、詳しい話を聞くことができて良かった。身がひきしまった。
- ・貴重な体験だった。もし、今後こういうタイミングあれば、生かしていきたい。

成果と課題

【成果】

- ・宮崎県での地震直後で、意識の高いタイミングでできたこと。熱心に各講座を受講できたこと。

【課題】

- ・各講座の時間配分とグループ分けの検討。
- ・地域の方の参加検討。



貴志川高等学校

実施日時	令和6年 11月 6日(水)
参加者	生徒195名、教職員37名、協力団体等35名 計267名
実施内容	シェイクアウト訓練、避難訓練、防災ゲーム、AED使用法、止血法 車いす避難サポーター養成講座、ロープワーク、自衛隊車両展示 等

ねらい

1. 近い将来、発生が危惧される南海トラフ地震をはじめ自然災害に備え、高校生の防災への意識を高め、地域防災の担い手として社会貢献できる青少年の育成を目的とする。
2. 関係機関や地域の協力、連携のもと、防災・減災に関するより専門的な知識や技術を習得することを目的とする。

○紀伊半島に震度7の南海トラフ地震が発生したと想定。教室内にいる生徒は、安全確保のために机の下にもぐり、身を守るシェイクアウト訓練を実施した。その後、生徒ホールからの出火に伴い、全校生徒が各教室から各避難経路を利用し、グラウンドに避難する訓練を実施した。

主なプログラム

- 1,2年生 防災ゲーム、AED使用法、止血法
ロープワーク、自衛隊車両展示
担架搬送法
- 3年生 車いす避難サポーター養成講座
AED使用法
- 全体 シェイクアウト訓練、避難訓練

生徒アンケート

- ・AEDの使用法を学んだ。いざというときは今日学んだことを活かしたい。
- ・津波防災ゲームを通して、時間が限られている中でいかに落ち着いて、適切な行動をとるか学べた。
- ・シェイクアウト訓練、避難訓練では、避難経路を確認し、落ち着いて行動できた。

概要

- 1,2年生・・・防災ゲームを実施。1年生は、地震・津波災害時に、避難場所までたどり着くまでの課題を体験し事前の備えを学ぶことができるゲーム、2年生は、みんなで協力して避難所を運営するゲームをそれぞれグループで行った。また、自衛隊実施の各プログラムも体験し、災害等が起きた際の身を守るための知識、行動を学んだ。
- 3年生・・・車いす避難サポーター養成講座を受講。災害時に避難経路上に想定される障害物、コースを体育館に設定し、要配慮者等を安全に避難場所に移動支援する体験をした。

成果と課題

【成果】昨年と同様に各外部団体の協力を得て防災スクールを実施することができた。生徒は各団体の方と交流し、各プログラムに積極的に取り組むことができた。また、事後アンケートの結果、昨年度同様90%以上の生徒は防災に対する知識や理解を深めることができたと回答した。

【課題】地震や災害はいつ起こるかわからない。常にそれらが発生したことを想定し、どう対応すべきかを訓練しておく必要がある。引き続き、防災に対する意識及び知識を高めるために、様々な防災プログラムを実施していきたい。

①

- ① 防災ゲームの様子
- ② 車いす避難サポーター養成講座の様子
- ③ 担架搬送法体験の様子
- ④ AED・心肺蘇生法体験の様子
- ⑤ 避難訓練の様子



②



③



④



⑤



和歌山北高等学校北校舎

実施日時	令和6年5月24日（金）・11月5日（火）
参加者	生徒906名、教職員56名 計962名
実施内容	シェイクアウト訓練、地震と津波についての学習、校内外避難経路確認等

ねらい

- 1 災害時における危険を認識し、日常的な備えを行うとともに、状況に応じて、的確な判断の下に、自らの安全を確保するための行動ができるようにする。
- 2 災害発生時及び事後に、進んで他の人々や集団、地域の安全に役立つことができるようにする。
- 3 自然災害の発生メカニズムをはじめとして、地域の自然環境、災害や防災についての基礎的・基本的事項を理解できるようにする。
- 4 実際に災害が発生した際、安全に避難できるように避難の方法に慣れておく。

主なプログラム

- 1 郊外避難訓練
- 2 シェイクアウト・校内避難訓練
- 3 防災についての学習

概要

- 1 令和6年5月24日（金）3・4限
1年生8クラス320名 職員18名
・事前に校外避難経路の確認として、学校より避難先である平井中央公園までの約1200mの避難経路をビデオ撮影したものを視聴し、その説明を行う。
・南海トラフ巨大地震等が発生した場合

の、津波からの避難場所として、第1目標として指定されている平井中央公園までクラスごとに徒歩による避難訓練を行った。

- 2 令和6年11月5日（火）2限
全校生徒906名 職員56名
場所（各教室）
 - ・事前にシェイクアウト訓練の内容について周知するとともに世界津波の日リーフレットの説明を行う。また、校内避難経路及び校外避難経路の再確認を行った。
 - ・10時の校内緊急校内放送により直ちにシェイクアウト訓練を開始した。一分間その場で先ず低く、頭を守り、動かない行動を行った。
 - ・シェイクアウトと訓練後、各クラス避難経路を確認しながらグラウンドに集合・点呼を行った。

- 3 令和6年11月5日（火）3限
全校生徒906名 職員56名
場所（体育館）
 - ・和歌山市危機管理局危機管理部地域安全課 講師 柴田通仁 様 より防災講座 『災害から生き残る』の講演を受けた。

・防災ハンドブックを使用し防災に関する情報を伝達した。

参加者の感想

- ・避難経路を実際に歩いて確認することができて良かった。
- ・避難場所を家に帰って親と共有したい。
- ・地域住民も一斉に避難することをイメージすることも必要と感じた。
- ・全校生徒がクラス別に分かれて校内の避難経路をスムーズにグラウンドに集合ができて良かった。
- ・災害発生後の行動の仕方や、災害心理学と避難3原則を学べて良かった
- ・能登半島地震について映像を見ながら説明をうけてわかりやすかった。
- ・南海トラフ地震臨時情報が発令したときの状況や行動の仕方を学べた。
- ・まずは自分を守る方法を身につけ、これからは被災者の救助やサポートなどができるようになりたいです。
- ・自助・共助の心を学べて良かった。
- ・家族で決めた避難場所で会うことができるように、家族と話し合い、家族全員で生き残り、犠牲者ゼロを実現したいです。
- ・地震のメカニズムや防災に関することをしっかり学び、実際起こったときに自分がどのように行動すべきかをイメージしておく必要があると感じた。

成果と課題

【成果】

近い将来発生が危惧される南海トラフ地震をはじめ自然災害に備え、地震や津波

について理解を深めるとともに、改めて防災の大切さを考えることができた。また、避難経路についても確認することができた。

【課題】

地域の自治会や公民館と協力して合同防災訓練も検討していきたい。また、近隣の小学校と連携して避難訓練も実施できればと考えている。

5月24日（金）3・4限

避難場所の平井中央公園に向けて移動
平井中央公園の様子



11月5日（火）3限 全校生徒
（体育館）



和歌山北高等学校西校舎

実施日時	① 令和6年 6月14日(金) ② 令和6年 6月20日(木) ③ 令和6年11月 5日(火) ④ 令和7年 1月17日(金)
参加者	生徒274名、教職員30名、 <u>延べ計900名</u>
実施内容	下記に記載のとおり

ねらい

- 1 火災や地震の非常時に備えて避難経路を確認する。また、自分と他人の命を守る行動ができるよう、防災に関する知識をしっかりと修得するとともに、隣接する和歌山さくら支援学校職員との連携を深める。
- 2 自然災害の発生メカニズムをはじめとして、地域の自然環境、災害や防災についての基礎的・基本的事項を理解するとともに、安全な避難方法等を確認する。



- ② 地震発生を想定し、身を守るための初期動作の確認として、全校一斉のシェイクアウト訓練を行った。



主なプログラム

- ① ハザードマップ調べ学習
- ② シェイクアウト訓練
- ③ 合同防災訓練
(和歌山さくら支援学校との合同訓練)
- ④ 防災学習(映像鑑賞等)

- ③ 大規模な地震が発生、隣接する和歌山さくら支援学校南棟1階の厨房室から火災が発生したことを想定し、防災訓練を合同で実施した。逃げ遅れた児童生徒の搜索・確認、救助活動の訓練を行った。

概要

- ① 地域で想定される自然災害について考える中で避難意識を高めるため、1年生において自宅のある地域付近のハザードマップや通学途中にある避難場所等の確認を行った。





- ④ 阪神・淡路大震災から 30 年の節目を迎えるにあたり、1 年生として 2 回目となる防災学習を行った。阪神・淡路大震災、東日本大震災、能登半島大地震を映像で振り返るとともに、非常食の必要性等について学んだ。



参加者の感想

- ・災害発生時、自分自身の命を守る行動をとることが最優先だと思った。防災について学べる機会があれば今後も積極的に参加したい。
- ・一人ひとりが自身の命を守る行動をとることが重要だと感じた。人を助けるために必要な行動がとれるようにしなければならないと感じた。
- ・学校でいるとき以外にも自然災害が起こるかも知れないので、いろんな場所での訓練が必要だと思った。機会があれば積極的に参加したい。

- ・家族で防災に対する意識を高めるための話し合いをできればと考えている。家族みんなが助かるために必要と思う。

成果と課題

【成果】

和歌山さくら支援学校と合同での防災訓練を実施した。両校舎の教職員・生徒とも災害発生時を想定し、迅速に自分の身を守る行動がとれていたように感じる。

また、ハザードマップ調べにより、近い将来に発生が予想される「南海トラフ地震」をはじめとする大規模な自然災害に対する防災の大切さを再認識することができた。

【課題】

昨年度に引き続き、隣接の和歌山さくら支援学校と合同での訓練を行うことができたが、更に防災の意識を高め、さまざまな場面を想定した両校での防災教育(学習)を実施していく必要がある。また、引き続き地域全体として災害に備える体制の構築に向け、地域の方々との合同防災訓練についても検討を続けていきたい。

和歌山高等学校

実施日時	令和6年11月15日（金）
参加者	生徒254名、教職員30名 計284名
実施内容	止血法、担架搬送法、ロープワーク、心肺蘇生法、車両展示、災害派遣

ねらい

- 1 防災スクールを通じて、災害時の対応力を身につける。
- 2 集団行動で協調性やコミュニケーション能力を養い、集団としての一体感も高める。

主なプログラム

- 1 止血法
- 2 担架搬送法
- 3 ロープワーク
- 4 心肺蘇生法
- 5 車両展示および災害派遣セットの展示・体験

概要

- 1 陸上自衛隊の協力のもと、止血法・担架搬送法・心肺蘇生法など、非常時における救急処置について学習した。
- 2 陸上自衛隊の協力のもと、ロープワークについての体験学習を行い、自衛隊車両および災害派遣セットの展示を見学した。

参加者の感想

- ・実際に体験したことで災害時の想定ができ、今後に生かせる良い経験になりました。
- ・自衛隊の車に乗ったり災害派遣セットを使ったりして、防災への興味が高まりました。

成果と課題

【成果】

集団での活動で協調性を養いながら、災害時に対応できる技能を体験することができた。

【課題】

過去何年間もこの規模で開催できておらず、教員に明確なイメージがなかった。中には事前に全容を把握して監督を務めたい者もいたが、年度を重ねるうちに教員の経験値も高まると想定し、来年度も引き続き教員と生徒が同じように参加する形式で行いたいと考える。

向陽高等学校

実施日時	令和7年3月21日（金）
参加者	生徒約310名、教職員10名、外部講師約10名 計約330名
実施内容	（例）避難所運営訓練、応急手当、マイトイレ作り 等

ねらい

- 1 講義を受けるだけでなく、自ら体験することにより、これまでの学び（理論）を生きて働く知識・技能（実践）に変換し、危機管理意識を高める。
- 2 「自助・共助・公助」を実践し、地域社会に貢献できる生徒を育成する。

主なプログラム

- 1 炊き出し・配給訓練
- 2 防災グッズ製作，衛生管理訓練
- 3 パーティション設置訓練
- 4 マンホールトイレ設置見学
- 5 救急法・搬送
- 6 AED操作要領

概要

- 1 非常食「α米」の作り方を確認し、試食する。
- 2 HR教室で防災グッズ（マイトイレ・レインコート・スリッパ）を製作する。
- 3 和歌山市職員指導のもと、体育館にてクラス単位でパーティションを組み立て、住居スペースを体験し、片づける。

- 4 校内のマンホールトイレの設置方法を見学し、和歌山市職員から説明を受ける。
- 5 自衛隊和歌山地方協力本部から招聘した講師の先生に救急法・搬送法を教授していただき、生徒も実践する。
- 6 自衛隊和歌山地方協力本部から招聘した講師の先生にAED操作を教授していただき、生徒も実践する。

参加者の感想

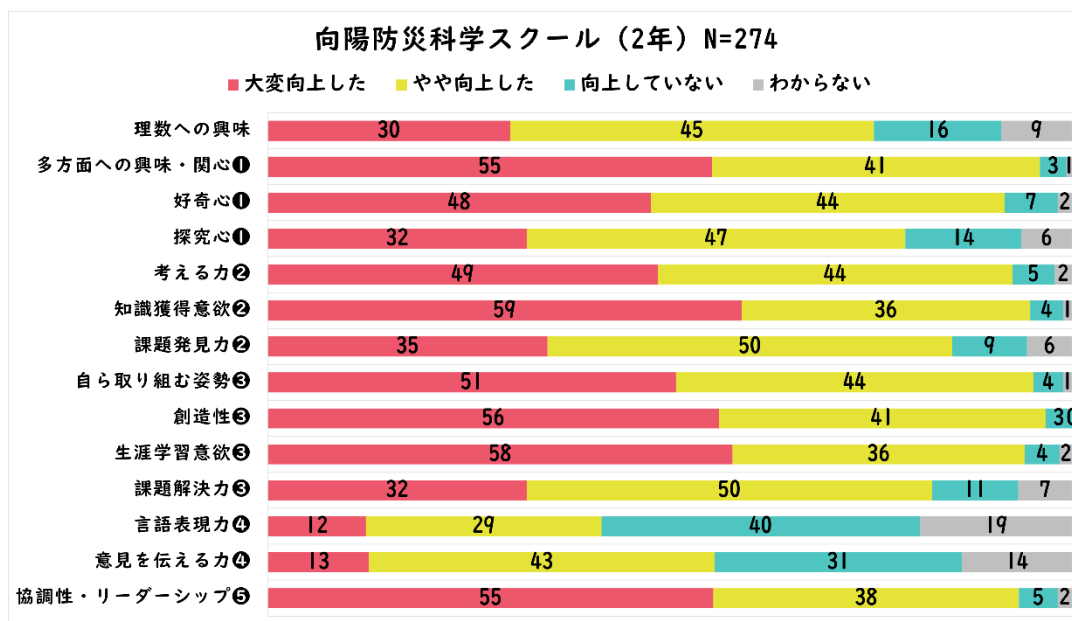
- ・危機的状況に陥ったときのイメージをもっと持とうと思いました。
- ・半日を通して防災について学ぶことで、他人事のように捉えるのではなく、実際に起こりうることなんだと意識して日々過ごしていきたいと感じた。
- ・災害に対して備えることの重要性を再認識した。

成果と課題

【成果】例年同様に複数のプログラムを用意し、一定時間で巡回する方式で行った。そのため、生徒は興味・関心を持ちながら集中して取り組むことができた。

【課題】今後は地域住民と連携した活動を模索していきたい。

【アンケート結果】



向陽防災科学スクールの様子

11月にはきいちゃんの災害避難ゲームを用いて「向陽防災科学ワークショップ」（高校2年生対象）を実施しました。

桐蔭高等学校

実施日時	令和6年11月7日（木） 14時10分～16時00分
参加者	生徒（高1、高2）556名、（中学1、2、3年）240名 教員 30名 計826名
実施内容	シェイクアウト訓練・避難訓練 地震・津波についての基礎講座（講義）

ねらい

- 1 地震・津波の発生時における、緊急避難に対応できる行動力を身に付ける。
- 2 自然災害等の現状及び減災等について理解を深め、将来直面する災害に対して、的確な思考・判断に基づく適切な意志決定や行動選択ができるようにする。
- 2 グラウンドへの避難後、体育館に移動し、県危機管理消防課より「地震・津波についての基礎講座～かけがえのない命をまもるために～」という内容で講義を頂いた。

地震・津波についての基礎講座 ～かけがえのない命をまもるために～



主なプログラム

- 1 シェイクアウト訓練・避難訓練
- 2 地震・津波についての基礎講座

概要

- 1 地震・津波発生を想定し、シェイクアウト訓練及び避難訓練を各授業教室からグラウンドへの避難ということで実施した。最初の地震発生の放送でシェイクアウト訓練を行い、避難指示の放送の後、クラス単位でグラウンドへ避難した。



参加者の感想

- ・最近地震が多発し、我が家でも話題にすることが増えたので、具体的に備蓄するものや和歌山県の防災アプリについて詳しく知れてよかった。
- ・被害状況の写真から悲惨な様子が伝わってきて、改めて地震に備えようと思える講座であった。
- ・中々行動できずにいたが、動画や今回の話を聞き、行動しようと思った。大切な人のためと思い行動しようと思う。
- ・自助・共助・公助を大切にしようと思う。

成果と課題

【成果】

- 避難訓練と講義を連続して行うことでより防災に対する意識を高めることができた。
- 講義の中で災害時の映像を見ることで「まだ災害はこない」「自分にはあまり関係ない」という考えを捨て、「今日からでも準備することがある」「いつ災害が来るかもしれない」という危機感を持ち、改めて災害の恐ろしさ、また準備の大切さを生徒自身が実感できた。

【課題】

当事者意識をさらに持ってもらうためには、体験型の防災スクールも有効だと感じた。今後避難所になった際に生徒自身が受け入れる側として何ができるかを検討していきたい。生徒が入学から卒業までに、今回行ったような講義型の防災スクール、そして体験型の防災スクール両方を経験することで防災意識を高めることができるだろう。

和歌山東高等学校

実施日時	令和6年7月11日（木）、11月5日（火）
参加者	生徒367名、教職員47名 計414名
実施内容	避難訓練、シェイクアウト訓練、防災学習等

ねらい

- 1 生徒の防災への意識を高める。
- 2 災害発生時に於いて、生徒が自らの命を守る行動ができるようにする。
- 3 郷土の偉人の業績を知る。

主なプログラム

- 1 避難訓練
- 2 シェイクアウト訓練
- 3 「世界津波の日」濱口梧陵に関する学習

概要

- 1 災害発生時、各教室からの避難を想定し、経路確認及び避難訓練を行った。
- 2 全学年の生徒、教職員が地震を想定し、命を守る行動がとれるようにシェイクアウト訓練を行った。
- 3 「世界津波の日」濱口梧陵のパンフレットや防災ハンドブックを活用し、郷土の偉人の業績、災害時にとるべき適切な行動等について学習した。

参加者の感想

- 地震が多いので、きちんと避難できるように訓練することは大切だと思う。
- 世界津波の日が和歌山県と関係があるとはじめて知った。
- 普段から逃げる準備をしておくべきだ。

成果と課題

【成果】

- 近い将来、起こると予測されている南海トラフ地震等の自然災害に向けて、自助、共助についての意識が高まった。
- 災害時にとるべき適切な行動や、普段からの備えについて意識することができた。
- 郷土の偉人の業績について知ることができた。

【課題】

- 地域等と連携した防災訓練は、コロナ禍で一旦途切れ、再開できていない。地域の方々を行うことにより、防災意識がより一層高まる上、学校周辺や通学路まで意識した訓練となるため、今後、関係機関や地域の方と連携した訓練を行いたい。

星林高等学校

実施日時	令和6年12月11日(水)
参加者	生徒320名 教職員10名 計330名
実施内容	一次救命処置(心肺蘇生とAED)／アルファ米炊き出しと試食／土砂災害ワークショップ「紀伊半島大水害被災体験紙芝居」／パーティション組立と撤収訓練・マンホールトイレ設営／地震体験車「ごりょう君」・水消火器の取り扱い・煙避難体験

ねらい

①災害発生時、安全を確保し敏速な避難行動がとれるようになる。②参加者を主体的に行動させることで、防災意識を高め「自助」「共助」「公助」の精神を養う。③「南海トラフの巨大地震」と「東海・東南海・南海3連動地震」による津波浸水・地震被害想定に対応した避難行動がとれるようになる。

主なプログラム

1. 一次救命処置(心肺蘇生とAED)講習【星武館】
人形を使った人工呼吸、胸骨圧迫の実技講習及びAEDの使用を学ぶ
2. アルファ米炊き出しと試食【生徒ホール】
非常用保存食「アルファ米」の炊き出しと試食
3. 土砂災害ワークショップ「紀伊半島大水害被災体験紙芝居」【情報処理教室】
語り部さんによる紙芝居を用いた紀伊半島水害被災の講話
4. パーティション組立と撤収訓練・マンホールトイレ設営【体育館】
段ボールのキットを使いパーティションと段ボールベッドの組立と撤収の訓練及びマンホールトイレの設営
5. 地震体験車「ごりょう君」による地震体験・水

消火器の取り扱い・煙避難体験【中庭】

「出張!減災教室」を活用した地震体験車「ごりょう君」による地震体験、水消火器の取り扱い・煙避難体験

概要

日 時 令和6年12月11日(水)

場 所 和歌山県立星林高等学校

参加者 生徒1年生320名 教員10名

①一次救命処置(心肺蘇生とAED)講習

対象:生徒50~60名及び教員2名

協力:日本赤十字社和歌山県支部

②アルファ米炊き出しと試食

対象:生徒70~80名及び教員2名

③土砂災害ワークショップ「紀伊半島大水害被災体験紙芝居」

対象:生徒30~40名及び教員2名

協力:和歌山県土砂災害啓発センター

④パーティション組立と撤収訓練・マンホールトイレ設営

対象:生徒80~90名及び教員2名

協力:和歌山市地域安全課・下水道企画建設課

⑤地震体験車「ごりょう君」による地震体験・水消火器の取り扱い・煙避難体験

対象:生徒50~60名及び教員2名

協力:和歌山県危機管理消防課、和歌山市消防局中消防署南分署

成果と課題

【成果】

一次救命処置（心肺蘇生法とAED）では、各自が救援者として活動ができるように、日本赤十字社和歌山県支部から2名を招き、人形を使った人工呼吸・胸骨圧迫の実技講習に加え、AEDの使用方法を学習した。救急車が到着するまでの間、何をすべきかを知ることで、いざという時に役立てたい。アルファ米炊き出しと試食では、生徒ホールと調理室のお湯を使ってスムーズにおこなうことができたが、実際に災害に遭った時、いかに大量の水・火器を確保するかについても考えておく必要がある。パーティション組立と撤収訓練・マンホールトイレ設営では、パーティションについては戸惑うことなく、スムーズに組み立てることができた。マンホールトイレの構造等の説明を受け理解を深めることができた。地震体験車「ごりょう君」による地震体験・水消火器の取り扱い・煙避難体験では普段できない体験をすることができた。

【課題】

- ・生徒は1つのプログラムしか受講できない日程となっているが、2つ以上を体験できる編成にしていきたい。
- ・近隣には小学校・中学校・高校があり、地域住民の方々も含め、災害が起こった場合かなりの混雑が予想される。共同訓練の実施などを検討する必要がある。
- ・実際の災害時には混乱した中で活動することになり、いかに緊張感を持って訓練できるかが課題である。
- ・訓練は、授業中のホームルーム教室を想定していることが多い。体育館・グラウンド・特別教室、休み時間中なども想定し、教員がその場面にいない時でも、生徒1人1人が的確な判断ができるような訓練も必要である。

一次救命処置（心肺蘇生とAED）講習



土砂災害ワークショップ 「紀伊半島大水害被災体験紙芝居」



マンホールトイレ設営



地震体験車「ごりょう君」 体験・水消火器の取り扱い



和歌山工業高等学校

実施日時	第1回 令和6年 8月 1日(木) 第2回 令和6年11月 5日(火)
参加者	生徒959名、教職員84名 計1043名
実施内容	地震防災についての講演会 シェイクアウト訓練・地震火災避難訓練 等

ねらい

- 1 防災と向き合い、正しい知識・判断力・行動力を身につける。
- 2 災害発生時に身の安全を確保し、すみやかに避難行動に移せるようにする。また「自助」・「共助」の意識を身につけさせる。

主なプログラム

- 1 講演会「地震防災についての基礎知識」
- 2 避難訓練・シェイクアウト訓練
- 3 災害時の対応と役割分担の確認、「世界津波の日」周知

概要

- 1 講演会「地震防災についての基礎知識」



《教室での講演の様子》

和歌山県危機管理・消防課の「出張！減災教室」を活用し、8月の登校日に1年生を対象に地震と防災についての講演会を実施した。

実施日 令和6年8月1日(木)

場所 和歌山工業高等学校 各教室
(熱中症対策のため、各教室にて
オンライン配信で実施)

対象 1年生 352名(9クラス)
職員 18名

講演テーマ「地震津波についての基礎知識」

講師 県総務部危機管理局危機管理・消防課よりの派遣講師

2 避難訓練・シェイクアウト訓練

全国で実施される緊急地震速報にもとづき、「大地震発生により、火災が発生した」との想定で、シェイクアウト訓練、その後全校生徒がグラウンドへ避難を行った。

実施日 令和6年11月5日(火)

対象 全学年 959名(27クラス)
職員 84名



《シェイクアウト訓練の様子》



《グラウンドへ避難する生徒の様子》



《グラウンドへ避難した生徒の様子》

3 災害時の役割分担の確認と「防災ハンドブック」等の活用

実施日 令和6年11月5日（火）

対象 全学年 959名



《教室にて担当教員から説明を受ける様子》

避難訓練後に、各HRで非常災害時における生徒の役割分担（消火班、搬出班、救護班、警備班、避難誘導班など）の確認を周知させる指

導を行った。

県総務部危機管理局危機管理・消防課のパンフレット「かけがえのない命をまもるために」等を活用し、災害時の対応について説明した。



成果と課題

【成果】

生徒アンケートでは、講演内容については大変役立ったという意見が多かった。近い将来、発生が危惧される南海トラフ地震に備え、防災への意識を高め、地域防災の担い手の育成、防災・減災に関する基礎的な知識を身につけることができた。

11月5日10時からの「防災和歌山市の訓練放送」に合わせて、防災避難訓練をおこなった。各教室・実習室で安全確保行動「まず低く、頭を守り、動かない」の訓練をするため、机の下等に隠れて身を守るシェイクアウト訓練をおこなった。その後、例年であれば、津波に対する避難という事で3階以上に避難する訓練を実施していた。今年度は、「地震により火災が発生した」との想定のもと、全員がグラウンドへ避難することに変更した。

例年、高層階への避難をおこなってきたが、少しマンネリ化している傾向があるため、今

後は「垂直避難」と「グラウンド避難」を交互におこなう方向で考えている。その方が、より効果的であると考え。

避難訓練では、迅速に避難する事とあわせて、次の3点について意識を持って取り組んでいる。

- ① 現実的な訓練とすること
- ② 自分の身を守ること「自助」
- ③ 地域の避難場所として「共助」について考えること

事後指導として、県危機管理部危機管理局危機管理・消防課のパンフレット「かけがえない命をまもるために」等を活用し、災害時の対応について説明した。あわせて「世界津波の日」の周知と、津波発生時の対応や危機管理について啓発を行った。

【課題】

8月に1年生を対象に「地震津波についての基礎知識」のテーマで講演を行った。近年の猛暑により教室のプロジェクタを活用したオンライン配信でおこなった。ただネットワークの不具合により、急遽音声のみの放送に切り替えた。各教室では担任が放送に合わせてパワーポイント操作をおこなった。事前に準備したつもりであるが、不測の事態に対応できなかったことが反省点である。

防災についての意識を高めるために、「自助」の視点と「共助」の視点が大切である。

「自助」については、高校生自身ある程度の自己防衛が可能である。しかし、「共助」の意識をどのように身につけさせるかが、今後問われている。

本校は海拔 1.7mのところであり、和歌山

市の防災マップでも津波が発生した場合は1～2mの浸水が想定される地域に位置している。津波警報が発令された場合、近隣の住宅地に住まわれている高齢の方等が、高層階がある本校に避難されてくることも考えられる。特に本校は、校舎が新しく地域の防災拠点としての役割もある。自助の避難訓練に加え、地域の方の避難を助ける共助の避難訓練も今後の課題として研究していきたい。

今年度の新たな取組として、「危機管理マニュアル」のリニューアルに取り組んでいる。「学校要覧」等の防災に関する部分を抜粋し、非常事態以外にも、生徒の事故やケガ等のマニュアルを作成している段階である。年度末に全職員に周知を図る予定で現在作成中である。



和歌山工業高等学校定時制

実施日時	第1回 令和6年9月10日(火) 第2回 令和6年11月5日(火)
参加者	第1回 生徒11名、教職員15名 計26名 第2回 生徒14名、教職員19名 計33名
実施内容	第1回 防災学習(煙避難体験、初期消火体験等) 第2回 防災学習(避難カード、災害伝言ダイヤル等)、避難訓練、耐震設備見学

ねらい

防災意識を高め、災害発生時に自分の身を守る(自助)とともに、地域の防災リーダーとして地域に貢献する(共助)ことのできる能力を育成する。

主なプログラム

- 1 防災学習(煙避難体験、初期消火体験、避難カード、災害伝言ダイヤル等)
- 2 避難訓練
- 3 耐震設備見学

概要

- 1 9月10日に和歌山市防災学習センターを訪問し、以下の防災学習を行った。

① 初期消火体験

センサー式消火器を使用して消火器の正しい使用方法と、てんぷら鍋火災の消火方法を学習した。



② 煙避難体験

バックドラフトを想定した部屋・姿勢センサー・人体に無害な煙により、より適切な避難方法を学習した。



③ VR 防災体験

VRシステムにより地震災害を再現し、専用のVRゴーグルとVRチェアで臨場感あふれる防災体験を行った。



2 11月5日に全校生徒を対象として、避難訓練を実施。和歌山県沖合で地震が起こり、津波の可能性が高いという想定で本館6階への避難を行った。



3 避難訓練終了後、防災ハンドブック等を活用し、防災教育を実施。地震が発生した場合にどのようにして自分たちの身を守ればよいか等について学習を行った。また、本校の耐震設備について動画で説明を行った後、実際に設備見学を行った。



生徒の感想

- 今まで何気なく通っていた場所に、あんな設備があることを知って驚いた。
- 地震体験は今までもやったことがあったけれど、今回の体験はすごいリアルだった。

成果と課題

【成果】

机上の学習だけでなく、実際に初期消火や煙からの避難について体験したことで、より効果的な学習ができた。

【課題】

今回は HR 教室で授業を行っている際に地震が発生したという想定であったが、実習棟で実習を行っている場合の対応についても今後訓練を行う必要がある。

和歌山商業高等学校

実施日時	令和6年11月18日(月)午前9時から午後4時15分までの間
参加者	生徒766名、教職員51名、計817名
実施内容	基礎講座受講、避難訓練、避難所運営ゲーム、体験型実習等

ねらい

- 1 近い将来発生が危惧される南海トラフ地震等の自然災害に備え、防災・減災に関する専門的知識や技術を習得させる。
- 2 地域防災の担い手として社会貢献できる生徒の育成。

主なプログラム

- 1 地震・津波についての基礎講座
- 2 垂直避難訓練(1・2学年のみ)
- 3 懸垂降下訓練の見学
- 4 アルファ米炊き出し・試食(1・2学年のみ)
- 5 マイトイレ製作(3学年のみ)
- 6 災害避難ゲーム(3学年のみ)
- 7 ロープワーク(3学年のみ)
- 8 救急法(3学年のみ)
- 9 初期消火訓練(3学年のみ)

概要

- 1 和歌山県危機管理消防課の協力のもと、地震・津波に関する基礎知識の習得のための講座を受講した。
- 2 校内において垂直避難訓練を行った。
緊急地震速報(訓練速報)により発災確認後、避難を開始。
避難中に想定を上回る巨大津波が襲来する可能性があるとの情報を受信し、校舎の最上階にとどまらず、屋上への避難を行った。
普段立ち入ることのない屋上への避難を行ったことにより、屋上への避難経路の確認、扉の解錠手順の把握、避難後の安全管理を通じて避難時の留意事項を再確認した。
- 3 自衛隊和歌山地方協力本部隊員による懸垂降下訓練の見学を行った。
隊員による訓練内容の説明後、校舎屋上から地上までロープを使用した降下訓練を見学した。

- 4 個包装の非常食（アルファ米）と飲料水を配布・説明後、特設の給湯ブースで各自給湯を行い、試食した。試食後は指定した収集場所でのゴミの一括・分別回収を行った。

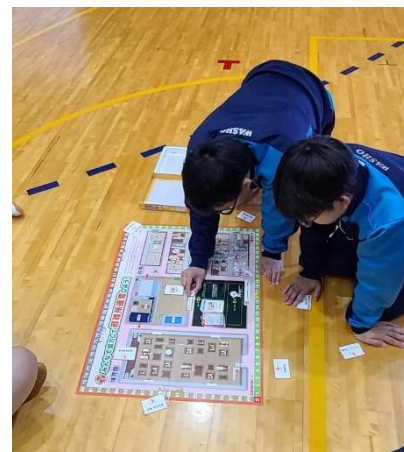
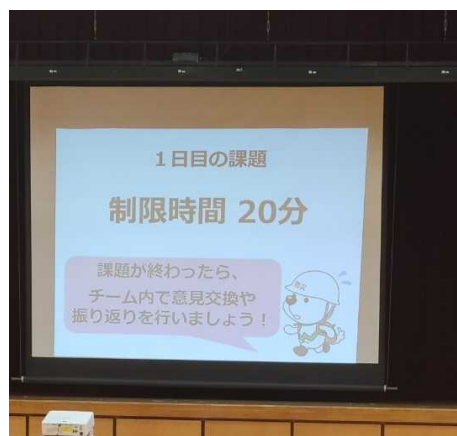


- 5 本校職員による簡易トイレの製作実習を行った。

和歌山大学災害科学・レジリエンス共創センター発出の資料「マイトイレの作り方」をもとに、新聞紙とペットシート等を活用した簡易トイレを製作するとともに、災害時における簡易トイレの重要性を学習した。

- 6 和歌山県危機管理消防課の協力を得て、避難所運営シミュレーションゲームを実施した。

生徒が各業務の担当班長として、時系列で発生する避難所内外の課題やトラブルに対応する訓練を行うことで、避難所運営側の業務を理解するとともに、判断能力を養った。



- 7 自衛隊和歌山地方協力本部の協力を得て、基本的なロープの結び方に関する実習をおこなった。



8 自衛隊和歌山地方協力本部の協力を得て、2種類の講座を実施した。

A班は傷病者発見から一連の行動訓練とAEDを活用した心肺蘇生法の実習、B班は大量出血に対する処置要領と応急担架の作成・運搬方法に関する実習を行った。



9 和歌山市消防局の協力を得て、消火器と屋内消火栓を使用した初期消火訓練を行った。

校内に設置された屋内消火栓の使用方法についての説明を受けた後、ロールプレイング形式で、水消火器と屋内消火栓を併用した消火訓練実習を行った。



参加者の感想

- 今日実際に避難訓練をして、はじめて屋上に上がって、いつもよりもリアルな訓練のように感じました。実際に災害が起こったときは、幼稚園の子たちや身体の不自由な人達が学校に避難してくるので、避難経路の確認をしておくべきだと訓練をして感じました。
- 家族と避難する場所の話はしていないので、してみようと思いました。地震対策をあまりしていないので家族で相談したいです。
- 自分だけ助かればいいと思わず、助け合いの気落ちを大切にして、周りの人に気を配り、思いやりの気持ちも大切にしたいです。
- 防災スクールに参加して地震や津波への意識がすごく変わりました。普段できない訓練ができて本当によかったと思います。

- 今回の防災スクールで私は今まで正しいと思っていたことが違っていたり、知らなかった知識を知ることができた。

成果と課題

【成果】

今回の防災スクールでは他機関の協力を得て、体験型の防災教育を行った。

本校では令和元年度以降、大規模な防災スクールを実施することができなかったが、今回の防災スクールを実施したことにより、具体的な対応要領を学ぶだけでなく、地域防災の担い手としての意識を高めることができた。

【課題】

本年度は来春卒業を迎え、成年として地域防災を担う3学年が充実したプログラムを受講できるように配慮したものであった。全学年が同日に3学年と同程度のプログラムを受講することが望ましいと考えているが、各講座の1回あたりの最大受講人数や施設面の問題から実施は不可能であった。次年度以降は学年ごとの分離開催も含めて検討する。

海南高等学校

実施日時	令和6年11月5日(火)
参加者	生徒366名、教職員28名 計394名
実施内容	避難訓練(全学年)、マイトイレ作り、アルファ米作成・試食、防災クイズ(1年)、段ボールベッド製作体験、ロープワーク、心肺蘇生法、AED使用法、車椅子体験・防災ナビアプリ活用法、クイズで学ぶ防災学習(2年)

ねらい

- 1 近い将来起こると危惧されている南海トラフ巨大地震等の自然災害に備え、防災・減災に関する知識や技術を身につけ、防災への意識を高める。
- 2 地域の防災を担うリーダーを育成する。

主なプログラム

- 1 避難訓練(全校生徒)
- 2 防災学習
 - 1学年 防災クイズQ&A
マイトイレ作り
アルファ米作成・試食
 - 2学年 防災ナビアプリ活用法
ロープワーク
クイズで学ぶ防災学習
心肺蘇生法・AED使用方法
段ボールベッド製作体験
車椅子体験

概要

- 1 避難訓練(全校生徒)

授業中に緊急地震速報が発表され、地震が発生したという想定のもと、全クラスでシェイクアウト訓練を実施した。また、校内で火災が発生したと想定して、全校生徒が教員の誘導により避難経路をとおり避難場所であるグラウンドへ避難した。全員の避

難完了、点呼確認のあと海南市消防署職員から訓練についての講評を聞いた。



- 2 防災学習(避難訓練後に実施)

1年生はHR教室でP.P.を用いた防災クイズQ&Aを実施し、災害への備えや減災のための具体的な方法を学んだ。また、ボランティア委員が中心となり、新聞紙を用いたマイトイレ作りを行った。各教室でアルファ米を何人かで試食し、感想を共有した。

2年生は、体育館にて防災実技講習を実施した。6つのブースから2つのブースを選び、体験活動を通して防災・減災に関する知識技能を学んだ。



参加者感想文

- 机が意外と小さくて、頭が入りきらなかったのでリュックや椅子で頭を守るようにした方がいいと気づいた。
- 防災クイズでは、ラップが応急処置に使用え、非常用の食料は散らして色んなところに置くと良い知り、驚いた。これを機会に防災意識をさらに高めていきたいなと感じた。
- トイレを新聞紙一枚で作ることができ、災害時にはとても便利だと感じた。1日では新聞紙トイレを4枚～8枚ほど使うから新聞紙も災害時に用意する必要があるなと考えた。
- 避難用ベッドは組み立てが誰でもできそう、安定感もあり丈夫だった。また、寝ている時の顔を見られないように、柵用のダンボールで隠しているのがとてもいいと思った。1つ1万程度で少しお高めですが、あると、とても便利だなと思いました。また胸骨圧迫は消防士の方がやっている、やわらかそうに見えましたが、いざ自分がやって見ると、とても固く、もし自分がその場に遭遇した時本当に心臓までマッサージできるのかと思いました。

成果と課題

【成果】

避難訓練では、あわてることなく避難場所へ移動した。1年生では防災クイズと生徒を中心としたマイトイレ作りを行った。また、2年生では避難所運営時の問題点や高校生ができることについて意見交換を行った。災害の備えをし、災害時には今回学んだことを少しでも実践したい等の感想が多くみられ、防災意識を高める機会となった。

【課題】

昨年度に、実技体験的な講習を計画し、実施することが課題として挙げられていたため、より多くの実技の体験ができるよう2年生は複数のブースにわかれ、希望した体験を行った。生徒の防災意識は高く、どの体験も熱心に取り組んでいた。シェイクアウト訓練の際に、グラウンドに避難したのち、さらにその後の行動を想定し高台に上がることや、校舎の上階に上がる訓練も行ってはどうかということと、避難訓練の回数を増やしてはどうかとの意見もあり、検討していく必要がある。

海南高等学校 大成校舎

実施日時	令和7年3月6日（木）
参加者	生徒 46名、教職員 10名、計 56名
実施内容	簡易担架作成訓練、消火器操作訓練、防災学習 等

ねらい

1. 頻発する自然災害に対する知識や心構えについての学習を行う。
2. 日常生活を通しての減災に対する実践的な態度を育成する。
3. 災害後に必要とされる行動及び共同作業のスキルを習得させる。
4. これらを通して災害に対する「自助」「共助」「公助」について3年間を通して総合的な学習を行う。

主なプログラム

大地震により本校舎でけが人が出たり、避難所を開設した場合を想定した訓練を実施する。

1. 日本赤十字社の方に講演をしていただき、「災害への備え」を今一度考え直す機会とする。
2. 消防署の協力を得て簡易担架作成訓練、消火器操作について受講する。
3. 地震体験車による地震体験
4. アルファ米、豚汁の炊き出し体験および防災食についての説明

概要

9：00～12：00 各学年に分かれてプログラムを実施

参加者感想文

- 今回、防災スクールで炊き出しの仕方や災害時に大切なことを学んだ。今はまだ「炊き出しのありがたさ」というものがあまり実感できないが、いざ災害が起こったときは「ありがたさ」がわかると思う。
- 災害が起きる前にできる対策はたくさんあるので、早めにいろんな対策をしておきたい。
- 災害時には自助と共助が大切だとわかった。共助は特に自分が率先して動くべきだと思った。
- 担架の作り方や消火器の使い方を知れたおかげで災害のときに使えると思った。パニックにならないように落ち着いて判断できるようにいろいろな情報を頭に入れて行動したい。
- これくらいなら大丈夫などの心のゆるみが死につながるので、普段から災害に備え、災害時は率先して避難したり行動したりしようと思った。少しでもたくさんの人が無事避難できるよう周りの人と協力し合おうと思った。

- 初めて地震体験車に乗って、同じ震度でも揺れ方がいろいろあることに気づいた。ただ地面が揺れるだけではなく、地響きのようなガタガタ揺れる揺れ方もあって、こちらの方が怖く感じた。
- 自分を助けることはもちろん、また、国からの助けを待つのも大切だが、助け合うことが一番大切だと思った。

成果と課題

【成果】 今回の活動を通して、「もしも災害が起こったらどうするか」だけではなく、「必ず起こるであろう災害に備え何ができるか」ということについても考える良い機会となった。また、講義の中で、生徒たちは「自助」「共助」について学び、いざ被災したときに、どれだけ自分たちの力が大きな意味を持つかということについても知るきっかけとなったのではないかと思う。次週には1年生全員が消防署員の協力を得て、AEDの使用を含む救命救急講習を受講する。この場においても「今自分がすべきこと」を学び、考えられる生徒が一人でも多くなればと思う。

【課題】 来年度は、今回の講演や体験をふまえた上で、新たな視点での体験学習を取り入れ、生徒たちの学びを深めたいと考える。



地震体験車



簡易担架作成訓練



消火器操作訓練



講演会



炊き出し体験

海南高等学校美里分校

実施日時	令和6年11月1日(金) 13:00~15:00 令和6年11月5日(火) 10:00~12:40
参加者	生徒20名、教職員8名、計28名
実施内容	講話、救護法実習(患者搬送、ロープワーク、止血法)、避難訓練 救命講習(胸骨圧迫、心肺蘇生法、AED取扱)等

ねらい

- 1 いつ発生するかわからない災害に対する防災意識を高める。
- 2 学校周辺地域における今後発生する可能性が高い自然災害について理解を深め、対処する力を身に付ける。
- 3 防災の観点から地域の特性を学習し、今後の地域防災活動に役立てる。

主なプログラム

●11月1日(金)

- 1 講話「防災について」
地域のハザードマップ及び東日本大震災における防災対策を中心とした講話
- 2 救護法実習
患者搬送：簡易担架を用いた搬送等
救急法：包帯等を用いた止血方法
ロープワーク：緊急時におけるロープ等の結び方 等

●11月5日(月)

- 1 避難訓練
- 2 胸骨圧迫
- 3 心肺蘇生法
- 4 AED取扱

概要

- 1 自衛隊担当者による講話
(全校生徒、教職員が受講)
地域のハザードマップから、土砂災害を主に、災害の特性、普段の心構え、非常時の自衛隊災害派遣の流れなどについてお話しいただいた。本校は中山間地域に立地しており、災害時における孤立化が想定されるため、物資の備蓄等普段の備えが大切であることを改めて理解することができた。
- 2 救護法実習
自衛隊員の指導のもと、全校生徒を3つのグループに分け、簡易担架を用いた患者搬送、包帯等を用いた止血方法、ロープを活用した緊急対応時の実習を行った。
- 3 避難訓練
授業中の地震発生を想定した避難訓練を行った。グラウンドに避難するまでの避難経路の確認など、現場教職員の指示の重要性を再認識した。
- 4 胸骨圧迫法・心肺蘇生法、AED取扱
紀美野町消防本部職員による救急救命講習を行った。胸骨圧迫の実技講習、人形を用

いた人工呼吸等心肺蘇生法、AEDの使用方法を学んだ。緊急時に、救命処置を行うことができるよう、何をすべきか、何ができるのかを学んだ。

参加者の感想

- 自助、共助が大切だと分かっているが、災害時パニックになって、周囲との協力が上手くできないかもしれない。落ち着いて行動できればいいなと思った。
- 止血法など、もし家族や知り合いに何かあったとき、自分が対処できる新たな手段を知ることができてよかった。実際に活用できるように練習したい。
- 訓練が始まったときはとても驚いたが、その後は落ち着いて避難することができた。実際に地震が起きても慌てず落ち着いて行動できればと思った。

成果と課題

【成果】

- 自衛隊と連携することで、震災時における具体的事例をもとにした実践的な内容となった。
- 実習を通して多くの救護法を学んだ。
- 講話では、地理的状况を踏まえた災害情報を含め、防災対策の重要性について深く学ぶことができた。
- 教職員の指示のもと、生徒が迅速に行動できた点について、紀美野町消防本部職員から高い評価を得られた。

【課題】

- 地域住民の参加等、過疎化・高齢化が進む

地域での連携の仕方や地域防災の在り方について、実施形態の工夫が必要である。

- 多くの生徒が専用バスで通学する状況を考慮し、通学時における防災対策等、より実践的な防災学習や避難訓練の実施が重要となる。
- 地域住民と合同で防災訓練が実施できるよう、周知の在り方等検討したい。

写真

● 11月1日（金）



● 11月5日（火）



箕島高等学校

実施日時	① 令和6年4月～12月【総合的な探究の時間(3年生)での防災学習】 ② 令和6年7月11日(木)【応急処置】(1年生) ③ 令和6年10月30日(水)【避難訓練】(1年生) ④ 令和6年12月13日(金)【避難所生活体験会の運営】 ⑤ 令和6年12月21日(土)【防災スクールの運営】(全校生徒)
参加者	生徒333名、教職員45名、地域住民等300名 計678名
実施内容	応急処置、避難訓練、地震についての学習、「災害時のリアルを知る」ワークショップ、災害時に高校生ができることについてのポスター発表及び企画、避難所生活体験会の企画・運営等の年間を通じた生徒主体の防災スクール

ねらい

- 1 近い将来起こると想定されている南海トラフ巨大地震などの自然災害に備え、防災・減災に関する知識や技能を身に付け、防災への意識を高める。
- 2 災害発生時には、自らの安全を確保しつつ、特に避難生活において、地域の一員として進んで社会貢献できる生徒を育成する。

主なプログラム

- 1 総合的な探究の時間において「防災」をテーマに学習
- 2 緊急事態に備え、応急処置訓練とAEDの使用方法を身につける
- 3 災害発生時の基本行動を理解し避難経路について確認する
- 4 「避難所体験会」の運営
- 5 「防災スクール」の企画・運営

概要

1 総合的な探究の時間において「防災」をテーマに学習

- ① 「南海トラフ巨大地震」に関する有田市の対策について有田市役所防災安全課による講義。
- ② 各機関のゲストの方々に来校いただき「災害時のリアルを知る」ためのワークショップを開催。

一般社団法人防災用品研究所	元石川県能登町地域戦略アドバイザー	稲むらの火の館
有田市社会福祉協議会	有田市役所危機管理監	有田市消防本部



- ③ワークショップの内容を踏まえ、デジタルポスター「高校生の自分が災害時にできること」の作成と、それをういたランダムグループ内での発表及びその代表者による全体発表。(1学期)



- ④各関係機関協力の下、6つのチームに分かれ「防災スクールで地域の方々に伝えたいこと」について企画。(2学期)

1. 医療(和歌山医療スポーツ専門学校・有田市立病院)
2. 行政×防犯(有田市役所・有田湯浅警察署)
3. 福祉(有田市社会福祉協議会)
4. 備え対策(一般社団法人防災用品研究所)
5. 救助(自衛隊)
6. 地域×栄養×非常食(有田食品株式会社・和歌山信愛女子短期大学)

2 緊急事態に備え、応急処置訓練とAEDの使用方法を身につける

- ① 場所 有田消防署5階多目的ホール
- ② 内容 応急処置とAEDの使用方法
- ③ 方法 消防署職員による伝授

3 災害発生時の基本行動を理解し避難経路について確認する

- ① 設定 紀伊水道を震源とする震度7の大地震が発生し、津波警報が発令
- ② 経路 右図参照
- ③ 方法 クラスごとに避難経路を歩いて確認
担任先導 → 教室に戻り点呼、体調確認、振り返り



4 「避難所体験会」の運営

12月13日には、行政×防犯チームの生徒が主体となって、箕島高校が避難所になったらという想定で「避難所体験会」を実施。地域住民の方約60名、湯浅小学校の児童約60名が参加。

- ① 「きいちゃんの災害避難ゲーム」を体験
- ② 仮想避難者リストをもとに、体育館をどのように居住スペースとしてレイアウトするか話し合い

③ 体育館にパーティションとテントを設置し、模擬避難所を開設

④ グループ別に体験

①簡易トイレ

②廃油燃料ストーブ

③箕高生考案防災バッグ

④箕高生による応急手当

⑤発電機・投光器の使い方

⑤ 炊き出し（水・アルファ米・^{はちだんご}鱧団子汁） 【調理：有田市食生活改善推進委員会 協力】

⑥ エム・ビー・エス株式会社 講演 「避難所における情報発信」について



5 「防災スクール」の企画・運営

1. 医療チーム

災害時の医療体制について知るために、まずは有田市立病院の先生に来ていただき、「災害時における医療」についてワークショップを実施。実際に災害が起きたと仮定し、配置図を見ながらどこにどんな危険が潜んでいるかグループでの話し合い。続いて、「応急手当」と「避難所での健康」という点に着目し、活動を計画した。

「応急手当」、「避難所での健康」については、和歌山医療スポーツ専門学校^{わかやま医療スポーツ専門学校}の先生や学生の方々にご協力いただき、12月21日のブルーアースラボ&防災スクールでの地域の方々向けレクチャーの練習、リーフレットやポスターも作成した。



2. 行政×防犯チーム

有田市役所防災安全課の方々に調査し、「避難所運営マニュアル」や「避難所資機材マニュアル」を高校生の視点で新たに作成。また、有田湯浅警察署の方による「避難生活における防犯」についての講話。

避難所資機材マニュアルは、段ボールのパーティションやファミリールームテント、簡易トイレ、発電機、投光器、段ボールベッドなど、使い方のマニュアルとつくと共に、動画を作成した。

防災スクールでは、格技場に資機材を設置し、実際に地域の方々に体験してもらった。代表生徒が有和中学校で「有田市の被害について」と題して発表を行った。



3. 福祉チーム

有田市社会福祉協議会の方々から「災害ボランティアセンター」について学び、自分たちで災害ボランティアセンター（災害VC）の訓練を行う。「総務・ニーズ班」「受付班」「マッチング班」「オリエンテーション班」の4つの班に分かれ、すべての班に有田市社会福祉協議会の方々の協力をいただきながら、訓練の実施方法を考えた。

12月11日（水）、12日（木）実際に地域の住宅や保育所などに出向き、困っていることがないか、インタビュー調査を行った。

12月21日の防災スクールでは、「有田市災害ボランティアセンター設置運営訓練」を実施。地域の方々に参加していただいた。



4. 備え対策チーム

「備え」とは何かについて一般社団法人防災用品研究所の方から、防災グッズの紹介をしていただき、「高校生が考える防災バッグ」を作った。他に、どんなものが便利か書籍やインターネットを使って調査。

生徒たちのアイデアで、「高齢者用」「子ども用」「一般の人用」の3種類を作成することを決定し、生徒たち自身で防災バッグを手作りした。一つ一つ手作業で防災バッグを作成し、12月21日の防災スクールで、地域の方に向けて説明を行った。



5. 救助チーム

自衛隊の方々から災害派遣の話聞き、自分たちが救助の面で役に立てることを話し合った。

12月12日には自衛隊の基地に行かせていただき、実際の救助について実技を学んだ。

12月21日の防災スクールでは、実際に被災したと想定し、体育館を被災地に見立て、簡易担架の作り方をレクチャーし、「救助レース」として障害物競走を実施することになった。さらに、災害時の救助方法についてのクイズも出すことになり、役割分担をしながら進めた。



6. 地域×栄養×非常食

和歌山信愛女子短期大学の先生方から「災害時に不足する栄養素」について、「有田食品株式会社」様から、レトルト食品製造にあたっての注意点についてそれぞれ教えていただき、災害時に栄養面で良い影響を及ぼす非常食のメニューづくりをした。また、地域の食材のPRにもつなげるため、有田の特産品についても調べた。

3つの班に分かれ「太刀魚」「みかん鶏」を使ったメニューを考案し、12月11日、12日に、有田食品様の工場で製造させていただいた。

12月21日のブルーアースラボ&防災スクールで地域の方々にレシピを紹介し、試食会を開いた。



7. その他

防災落語家の方、地震体験車、和歌山県警音楽隊にも協力してもらい、それぞれに催し物を開催。また、スタンプラリーを実施し、景品に「圧縮タオル」や「長期保存水」など防災の啓発ができるものを用意した抽選会を行った。



参加者の感想

【地域の方】

- ・避難所体験会では高校生が主体となって避難所運営を行ってくれたので、とても心強かった。避難所にどんなものがあるのか知れたので参加して良かった。
- ・避難所体験会では実際に避難者リスト（90代 骨折や、車椅子、妊婦、外国人など）を作ってくれており、どんな配慮をしてどう配置すれば良いか高校生と意見交換が出来たことが非常に良かった。私自身、赤ちゃん連れで参加したが、ファミリールームテントで授乳させてもらい、避難所生活のリアルを体験できた。
- ・高校生が運営している防災スクールは初めてだったので、すごく興味深いものだった。小さな子どもにも分かるように声かけをしてくれた。堂々と発表する姿に感動した。
- ・色んな側面から防災を考えていることが知恵になります。知恵や経験は災害時に必ず役に立ちます。この経験は高校生にとっても未来の有田市にとっても素晴らしいものになると思いました。1人でも多くの人に知って欲しいし、伝えてほしいと思います。子ども達が動けば、大人が動きます。みんなで和合し、助け合う社会になってほしいとおもいます。
- ・講演を聞いて、避難所の展示物を見やすくするポイントを分かりやすく説明してくれました。案内系はゴシックで、メッセージ系は手書きで、また、目的に応じて色を統一するなど、情報がいつの情報なのか、整理することも大切だと学びました。

【1・2年生】

- ・3年生の先輩方がポスター発表しているのを聞いて、災害について備えていきたいと思いました。
- ・災害発生後という視点だけでなく、減災や予防の視点で発表されている先輩達もいて、勉強になりました。
- ・防災バッグを自分たちで1つ1つ手作りしたと聞いてびっくりしました。ハギレをつかってSDGsにも貢献していてすごいと思いました。
- ・自分たちは災害時にどんなことができるか、今のうちから考えていきたいです。

【3年生】

- 探究の時間に防災について学ぶ前は、災害は他人事だと思っていました。しかし、ワークショップで色々な話を聞き、いざ自分が災害に遭ったらどうしたら良いか自分ごととして考えることができるようになりました。
- 防災については小学校のころからずっと学んできたので、知っていることばかりかと思ったけど、どんどん新しい防災グッズができていてびっくりした。過去のことを伝えることも大切だけど、最新の情報をしっかりとキャッチすることも大切だと思った。

【教員】

- 防災バッグの中身について、被災の経験がないにも関わらずしっかりイメージし、災害時を想定し、想像力を働かせて考案したと感じた。
- 被災地の方のお話が直接聞ける機会はなかなかないが、ワークショップを通して被災地のリアルを知れて良かったと思う。
- 地震の一番近い被災地「阪神淡路大震災」とも何か絡めることができればなお良いのではないかな。
- 高校生が災害時にどれだけ活躍できるか改めて実感した。
- この地域に住みながら防災に対する意識が低い生徒が多いと感じていました。しかし、南海トラフの臨時情報が出たこともあり、「災害」が生徒にとって非常に身近なものになっていた。今年度初めて3年生の生徒が防災について探究する中で、本当に真剣に取り組む生徒が多いと感じた。自分ごととして、解決策を考える生徒が多かったように思う。
- 防災学習が進路に結びついている点も非常に良いと感じた。（それぞれのチームで学んだことを今後の進路に活かしたいという生徒が多かった）
- 3年生だけでなく、1・2年生も防災について学ぶ機会が増えたら良いと思う。

成果と課題

【成果】

- 応急処置、避難訓練では、参加者全員が体験することにより、知識・技術が身についた。
- 「避難所体験会」では、小学生が参加してくれたことにより、「小学生に伝えたい」という思いから高校生の意識が非常に高くなった。
- 地域の方々と協力し、避難所運営についてのノウハウを学ぶことができた。

【課題】

- 高校生が主体となって防災スクールの企画・運営を行うことが初めてだったので、戸惑う生徒が多かった。次年度は2回目の実施になるので、もっと先を見通して計画したい。
- 防災スクールをもっと広く周知し、近隣の小中学生にも参加してもらえるようにしたい。
- 実際の緊急時に、どれだけ冷静に対応できるか。避難経路の早期確認。

有田中央高等学校

実施日時	令和7年1月24日（金）
参加者	生徒68名、教職員13名 計81名
実施内容	非常食体験、起震車乗車、パラコード編み、AEDの使い方講座、災害に備える講座 等

ねらい

- 1 近い将来発生するであろう災害等に備えて、防災への意識付けを行う。
- 2 災害発生時には、自らの安全を確保し、進んで地域の一員として役立つことができる。

主なプログラム

- 1 非常食体験
- 2 起震車体験／パラコード編み
- 3 AEDの使い方講座／災害に備える講座

概要

- 1 非常食体験

各クラス4人1グループとなり、水からもどしたアルファ米とお湯からもどしたアルファ米を食べ比べた。



- 2 起震車体験／パラコード編み

起震車に乗車し、震度6の揺れを体感した。待ち時間に、災害時に、ほどいて様々な用途で使用出来るパラコード編みでプレスレット等を作った。



3 AEDの使い方講座／災害に備える講座

学年を2グループに分けて、20分の講座を2つ受講した。1つは、AEDの使い方について、AEDデモ機等を用いて、実際に使用する練習を行った。もう1つは、災害に備える講座として、今から体育館で3日間過ごすと仮定して、防災リュックに何を入れておくべきかグループで考えた。



参加者の感想

- 起震車に乗って、あんなに大きな地震を実際に体験した人がいるのかと思うと、悲しかったし、できれば今後起こって欲しくないと思いました。改めて防災をすることが大切なんだと知れて良かったです。
- 一番印象に残ったのは、AEDの使い方と心臓マッサージです。はじめて体験したけど、使い方を知れて良かったです。
- アルファ米わかめご飯がすごいなと思いました。とてもおいしく、被災した時も、これがあれば良いなと思いました。
- パラコード編みは、簡単に作れて、災害時にも役に立つもので便利だという事を知り、とてもかわいくできたのでうれしかったです。そして、日頃から災害に備えたいと思いました。

成果と課題

【成果】

ほとんどの生徒が、前向きに、真剣に取り組み、防災への意識が高まったように思う。パラコード編みを鞆につけて登校する生徒もおり、使える日が来ないことを願うが、実際に起こった時に何かの役に立てば良いと思う。

また、今年度はじめてAEDの使い方について学ぶ講座を養護教諭と協力して、実施した。生徒達にとって良い機会となった。次年度以降も継続していければと思う。

【課題】

5・6限の2時間で行ったが、講座は、1講座20分と大変短くなってしまった。また、移動時間短縮のため、体育館内で、同時に2講座を行ったため、声が聞き取りづらくなってしまった。次年度以降、時間割の調整と内容の精査をし、改善していきたい。

有田中央高等学校清水分校

実施日時	① 令和6年 8月26日(月) 2限～4限 ② 令和6年11月29日(金) 4限
参加者	① 生徒2名、教職員8名 計10名 ② 生徒2名、教職員8名 計10名
実施内容	① 防災スクール「災害に対する備えと避難所体験」 ② 「世界津波の日」地震避難訓練、土砂災害について

ねらい

- ① 能登半島地震における自衛隊の活動を通して、災害に対する備えについて理解を深める。全生徒、保護者、全教職員の共通理解と協力のもと応急処置、救急体制の習熟に努め、防災意識の向上を図る。
- ② 地震発生時にそれぞれの場面に応じた身の安全を確保する行動をとるなど、適切な対応行動を身に付けるとともに、日頃から地震に対する防災意識を高める。また、土砂災害について、清水周辺は山地であり、身近に起こりえる災害であるため、土砂災害について正しい知識、備えを身に付ける。

主なプログラム

- ① 自衛隊和歌山地方協力本部による「災害に対する備えと避難所体験」を実施
防災講話：能登半島地震における自衛隊の活動、災害に対する備え
実習：止血法等応急処置、患者搬送、避難所での生活と日頃の備え



- ② 「世界津波の日」地震避難訓練、土砂災害について
シェイクアウト訓練、避難誘導、救護体制の訓練、「世界津波の日」「稲むらの火」に関する講話
わかやま土砂災害マップの確認、避難所マップの確認、避難カード記入



概要

- ① 自衛隊和歌山地方協力本部による「災害に対する備えと避難所体験」を実施
 - ・防災講話では、能登半島地震における自衛隊の活動を通して、地震直後の様子や人命救助、各種支援（給水、炊き出し、入浴、医療、主要道路の確保）について理解を深めた。
 - ・応急処置として緊縛止血法や、身の回りにあるものを利用した応急担架での患者搬送等の実習を行った。
 - ・「災害に対する備え」では日頃から防災意識を持つことの重要性を学び、平素に近い生活ができるように備えておくことで、ストレスの軽減につながることを学んだ。
- ② 「世界津波の日」地震避難訓練、土砂災害について

地震発生時の身を守る行動、避難経路の確認を行い、緊急地震速報の模擬放送により実際に運動場に避難。その後、講話により「世界津波の日」「稲むらの火」の由来についての学習をした。また、わかやま土砂災害マップで清水分校周辺の状況を確認、清水分校体育館が避難所となっていることを確認し、どのような行動を取るべきかを学習した。

参加者の感想

- ・災害における備えは本当に大切だと改めて感じる事ができた。
- ・災害が起こったとき、まずは自分自身の安全確保が大切であることが分かった。地域の方々の助け合いで、多くの方が救助されたことに驚いた。
- ・家族と事前に話し合うことが大事だとわかり、準備することで家族のことも守りたい。

成果と課題

【成果】 防災スクールでは、能登半島地震の様子や自衛隊の活動について理解を深めることができた。また、止血法や応急担架の実習、自衛隊の方が日頃準備している物を実際に手に取ることで、防災意識を高めることができた。地震・避難訓練では、過去に避難訓練の数日後、実際に地震が起こったこともあり、より一層主体的に取り組むことができた。学校がある清水地区は、山間部に位置し、土砂災害は、身近に起こりえる災害であり、清水分校体育館が避難所になっていることから、生徒たちは、自分のこととして考えることができた。

【課題】 山間部のため津波は想定外であるが、土砂崩れや路面崩壊、倒木による交通の遮断や、電柱や電線の損壊による停電の被害は十分予想される。過去には、大きな台風の影響で、有田川町の山間部で停電が長期間続き、分校の生徒の中には10日以上停電状態だった者もいた。学校のあある地域は比較的早く復旧したが、電話・インターネットはもちろん携帯電話も不通になり、生徒や有田中央本校との連絡もできなかった。災害後の状況に対応できる体制づくりが必要である。現在、災害時の対応について近隣の中学校小学校との連携も進めている。令和5年1月25日には、大雪のため清水地域の道路が全面通行止めとなった。この通行止めは、1日で復旧したが、冬季の雪に対する備えも必要である。また、防災スクールは、保護者にも参加を呼びかけたが、今回は参加していただけなかった。保護者にとっても有意義な内容にする必要がある。

耐久高等学校

実施日時	令和7年 3月 14日(金)
参加者	生徒179名、教職員12名 計191名
実施内容	湯浅広川消防組合の指導による各種防災実技訓練

ねらい

1. 高校生の防災意識を高め、地域防災の担い手として社会貢献できる人材の育成を目指す。
2. 関係機関と連携し、防災・減災に関するより専門的な知識を習得する。

主なプログラム

- 開講式
- 実技訓練
 1. ロープワーク
 2. 起震車による体験
 3. 煙体験
 4. AED 心肺蘇生法
 5. タンカでの搬送
- 閉講式
- HR 教室にて感想文

概要

体操服に更衣の上ハンドボールコートに集合して開講式を行う。学校長挨拶・湯浅広川消防組合による講話のあと、上記 5 つのプログラムを湯浅広川消防組合指導の下、クラス単位で各訓練を 30 分間のローテーションで実施する。実技訓練終了後、閉講式にて湯浅広川消防組合の講評を受け、HR 教室にて感想文を書く。



開講式



起震車による体験



ロープワーク



煙体験



AED 心肺蘇生法



毛布タンカでの搬送

参加者感想

1年1組 女子生徒

今回の防災スクールを通して、いざというときに自分たちができることについて学びました。ひもや縄がある場合、根本となる部分を固

定させる結び方や、人が倒れていたとき、意識がないときの運び方など、個人でできることがたくさんありました。災害時に大切なことの一つに若い人の戦力が大きく関わってくると思います。だから、自分の命を守りつつ、いろいろな人を助ける行動をしたいと強く思いました。また、自分自身の命を守るためには、煙は吸わないように低い姿勢で避難しなければならないこと、それから、地震体験の車は、震度6までの地震はとても大きく、立てないくらいだったので、まずは机や椅子で頭を守り、固定させることが大切ということが分かりました。これからの将来、災害が起きるかもしれないことを想定して、私ができることの知識を広げていきたいです。

1年2組 男子生徒

今回の防災スクールでは、起震車による地震の揺れの体験や、AEDや担架での搬送について実践的に学ぶことができた。地震の体験では、この揺れが家や学校で起きると周りのものはどうなるだろうかと考えながら、再度備えを見直すきっかけになった。毛布を用いた担架作りは、作り方が簡単で、でも知らないことばかりだったため、実際の災害時にも使えるように覚えておきたいと思った。心肺停止のときに行う胸骨圧迫やAEDの体験は、授業で学んだ知識もあり、すぐに始めることができた。手の位置がずれてしまったり、正しい姿勢で行うことができなかつたりと、最初はとても難しかったが、少しずつ慣れて実践することができた。いざというときに、率先して人命救助のため動けるようになっていきたい。近い将来、災害による甚大な被害が予想されるので、日本に住む身として、一人一人が自覚して防災・減災に取り組むことが強く求められると思う。

1年3組 女子生徒

今まで何度か防災について学ぶことがあったため分かったつもりになっていたけど、今日の防災スクールを体験することで想像とは違っていたりして新たに知識を増やすことができました。煙体験では、初めての経験で思っていたよりも前が見えず、体を低くしても見にくくて、これが本当の火災だったらすごく焦って逃げ遅れてしまいそうだと思います。自分の身を守るために、この経験を活かしていきたいです。また、心臓マッサージは時間がたつにつれて力がなくなり、押せなくなってしまったので、もっとうまく全身を使えるようになりたいと思いました。人の運び方については驚くほど簡単に運べたり、地震体験では揺れの強さに驚いたけど、実際に地震が起こったときに身を守れるように日頃から防災の意識を高めようと思いました。

1年4組 女子生徒

私は今まで起震車にしか乗ったことがなかったので、今日は防災スクールの体験はよい経験になりました。胸骨圧迫も初めて体験してみても、大体のテンポが分かったのと、思ったよりも力が必要で深く圧迫できなくて、その割にテンポも速くて体力的に疲れしました。担架は、人を持ち上げるのに意外と力があることが分かり、身近なものでも作れることも分かりました。ロープは、結ぶときにぐちゃぐちゃになって難しかったけど、友達に教えてもらったらできるようになったのでよかったです。煙体験の部屋は、全然見えなくて出られないと思いました。実際にしゃがんでいるときと、立っているときで見え方が変わったのが驚きでした。今回は、教室で体験をしたので、作りが分かっていたからなんとかあったけど、初めての場所で

火災が起こったら逃げられないだろうなと思って怖かったです。

1年5組 男子生徒

私は、今までの人生の中で津波がくるほどの大きな地震を体験したことがないので、とても有意義な時間になりました。特に印象に残っているのは煙体験と地震の揺れを体験したことです。煙体験は教室でやったので、机が目印となりまだ行く方向が分かったけど、実際にあんなに視界を遮られたら身動きが取りにくくなると思うので、今日習ったことをしっかり日常から意識していきたいです。また、地震体験は、起震車に乗る前は、友達が乗っているのを見ていてそんなにすごくないなと思っていました。しかし、実際、起震車に乗ってみると見ていた以上にとても揺れが大きくてびっくりしました。今回体験した震度は5から6ぐらいだったので、震度7が起こったときのことを想像するだけで怖くなりました。

成果と課題

防災教育の柱として、

- ①災害に対する危機意識を持ち、防災・減災に主体的に取り組む。
- ②災害発生時に自分の命を守るとともに、直後の救助活動に取り組む。
- ③災害後の活動に積極的に取り組む。

以上3つの項目に重点を置いて取組を行い、生徒たちに防災・減災を意識し、南海トラフ巨大地震が起こったとき、自分の命を守るとともに、高校生として何が出来るのかを考えられるようになってきている。今後、具体的にどのように行動していくかを地域と連携しながら検討し、体制を整えることが課題である。

耐久高等学校定時制

実施日時	令和6年11月8日（金）
参加者	生徒17名、教職員9名、計26名
実施内容	疑似地震体験、避難訓練、応急手当普及講習救命入門コース 受講

ねらい

近い将来、起こると予測される南海トラフ地震及びその他の地震災害から命を守るための方策を疑似地震体験や応急手当講習を通して学ぶ。

主なプログラム

- 1 疑似地震体験
- 2 避難訓練
- 3 応急手当普及講習 救命入門コース

概要

- 1 「出張！減災教室」の起震車「ごりょう君」による疑似地震体験を学年別に実施した。当日、雨天で起震車を使用できない場合も考えて防災啓発用 DVD を用意しておいた。
- 2 本校の避難経路を通過して「湯浅広川消防組合 消防本部 地域防災センター」まで避難した。
- 3 地域防災センターにおいて応急手当普及コース救命入門コースを消防士の方々の指導の下、DVDでの説明を見た後、グループに分かれて救急時におけるAEDの使用方法を訓練した。

参加者の感想

- ・ 緊急の時どうするかについてよく学べました。いざ応急処置をしなければならなくなったらできるかどうか不安だけど、今日学んだことを生かして自分の全力を出したいです。
- ・ AEDの使い方を詳しく改めて知ることができたので、今後このような状況に出くわした時、少し自信を持って行動できる気がします。起震車で地震の怖さを体験でき、良い経験になりました。
- ・ 今日の体験を通じていかに救命の知識が大切なのかを知ることができました。いつかこの知識を使う場面が来るかもしれないのでその時は頑張ります。

成果と課題

【成果】

生徒たちは、起震車で大地震に近い揺れを疑似体験し、地震の揺れの強さや恐怖を実感した。これにより、実際の地震発生時に冷静に対処するための心構えを持つことができた。

（起震車での疑似地震体験の様子）



また、避難訓練では実際に避難経路を確認し、避難場所までの時間や危険箇所などを知ることができた。その後受けた応急手当普及講習ではAEDを使っての心肺蘇生法を訓練し、生徒にとって貴重な体験となった。また、消防士の方々の説明を熱心に聞き、自分事として捉え、緊急時の対処法に自信がついたようだ。

(DVDでの説明を見る)



(AEDの訓練の様子)



【課題】

夜間定時制であるため、校外の避難場所への避難訓練は危険を伴い、注意が必要だった。また保護者の方にも訓練に参加してもらうことも視野に入れていきたい。訓練時だけで終わることなく、日頃から防災に対する意識を持たせ、定期的にこれらの活動を続けていくことが防災・減災の観点から大事なことである。

日高高等学校・附属中学校

実施日時	① 令和6年 4月26日(金) ② 令和6年10月24日(木) ③ 令和6年11月 5日(火)
参加者	① 828名(中高生徒778名 中・高職員50名) ② 828名(中高生徒778名 中・高職員50名) ③ 828名(中高生徒778名 中・高職員50名)
実施内容	① 避難訓練 ② 防災スクール ③ シェイクアウト訓練

① 避難訓練

ねらい

大地震や津波の発生時、迅速かつ安全に対応できる行動力の育成を図るとともに、校内外の避難経路を確認する。

主なプログラム

- 1 グラウンドから校外への避難
- 2 HR 教室で感想文記述
- 3 避難完了時刻報告

概要

- 1 点呼確認後、教員引率のもと、校外で津波が発生した場合の避難場所へ避難する。(避難時間計測)
- 2 HR 教室で成果と課題について記述する。
- 3 学年別の避難完了時間を報告する。

参加者の感想

- 片道30分かかったけど、実際災害が起きたときに間に合うのかと思った。運動靴に履き替えたから何とか歩けたけど、ローファーだと大丈夫なのかと思った。

- 細い道や橋などがあり、実際地震が起きたら周辺の橋や壁が崩れて通れなくなると思った。その為、日頃から周辺道路を熟知しておく必要があると思った。
- 実際、災害があれば避難所まで、走ったり、飛び越えたりしていかなければならないため、普段からそのための体力をつけおく必要があると感じた。

成果と課題

【成果】

- 昨年に引き続き今年度も、生徒が校外に所在している時を想定して校外避難訓練を行った。生徒は、避難する方面は元々知っていたが、避難場所までの細かなルートを知ることで、危険箇所や迂回ルートを考える良い機会となった。

【課題】

- 昨年の反省から、細い通路や用水路を迂回するルートで実施した。実際の避難の際には最短・最速でなおかつ安全なルート確保の両立が必要である。
- 生徒は、右側通行を基本としていたが、場所によっては、歩行渋滞が起きるため、教員側の臨機応変な指導が必要である。

② 防災スクール

ねらい

大災害はどの地域にも起こると想定し、いかなる状況であっても、正しい判断と的確な行動によって、自らの命を守ること、人を助けることが期待される、そのための実践力を高める。

主なプログラム

- 1 自衛隊和歌山地方協力本部による防災スクール（高校1年生）
- 2 御坊市消防本部による防災スクール（高校2年生・附属中学生）
- 3 きいちゃんの災害避難ゲーム
～避難所運営ゲーム～（高校3年生）

概要

- 1 『心肺蘇生法』・『ロープワーク』・『簡易担架・止血法』の3展開で実施。心肺蘇生法は1分間に100回のリズムで行う。身近にあるものを利用した簡易担架作成や止血法。ロープワークなど、漠然と手法を学ぶのではなく、回数や時間など、理論的に効果を理解して活動する。
- 2 『消火訓練』・『煙体験・バケツリレー』・『災害DVD視聴』の3展開で実施。消火訓練は消火器の扱い方や消火をする疑似体験を行う。煙体験は口や鼻をハンカチや布・服などで覆う。バケツリレーでは、本来の水ではなく、野球ボールを代用し、供給係や補給係など役割を分担しタイムを各クラスで競った。DVDの

視聴では、和歌山県で津波が発生した際のスピード感などを学べる内容であった。

- 3 『きいちゃんの災害避難ゲーム』では、地震発生時の避難所運営を体験し、吐嗟の場合でも判断できる状況判断力を養う。

参加者の感想

- ・簡易担架は自分たちが着ている服でもつくれることを知った。
- ・心肺蘇生法では、圧迫時の力加減が難しく、同じリズムで続けなければならないため、命を助ける信念が必要だと感じた。
- ・消化器を使うにあたって、風下にいるときや横風が強い日は、使い方を注意しなければならない。
- ・煙体験では、消防の方が周囲に居てくれたこともあり、スムーズに進めたが、実際の煙は真っ黒で、前がほとんど見えずに、息もしづらいため、パニックに陥るかもしれない。
- ・バケツリレーでは、クラス全員が息を合わせて回していかないと、タイムが縮まらなかった。実際の現場でも焦らずに協力したい。
- ・実際の避難所運営では、事前にどんな人がいるのかを知っておくことで、各部屋をどう使用すべきかが変わってくると感じた。

成果と課題

【成果】

- 命を守るための知識理解と、意識改革を趣旨とし、最も重要なのは、災害が起って当然という心構えと、そのための準備が必要であることを学んだ。

(1年生)

- 災害が起って、傷病者に対して命をつなぐための直接的なアプローチ(心肺蘇生法・止血法・簡易担架・ロープワーク)を学んだ。

(2年生)

- 火災が起こった時の避難方法(煙体験)、消化訓練について具体的に学んだ。また、バケツリレーでは、実際に重みのあるバケツを中継することで、避難場所等での協力の必要性を学ぶことができた。

(3年生)

- 災害時の迅速な避難行動や、日頃からの備えの重要性、円滑な避難所運営のために必要となる協力体制を学んだ。

【課題】

- 附属中学の防災スクールの内容が、毎年同じような中身になっているので、来年度は違った内容を展開できるよう、振り分けていきたい。

③ シェイクアウト訓練

ねらい

緊急地震速報が発表された時、それぞれの場面に応じた適切な行動を身につける。

主なプログラム

授業実施場所(教室・グラウンド・体育館等)でのシェイクアウト訓練

概要

午前10時に、放送室から緊急地震速報を流す。職員・生徒とも(頭部を低く保護して動かない)をテーマにして、机の下など安全な場所に避難する

日高高等学校 定時制課程

実施日時	令和6年7月16日(火)、9月3日(火)、11月5日(火)
参加者	生徒16名、教職員9名 計25名
実施内容	被災者救助(救急救命)訓練、火災避難訓練、地震体験車「ごりよう君」、津波を想定した避難訓練と避難経路確認、ライフジャケット脱着訓練

ねらい

- 1、災害についての知識を身につける
- 2、災害から自らの命を守るとともに、被災者を救助する行動力を養成する
- 3、災害から生き抜く力を身につける

主なプログラム

- 1、火災、津波に対して各状況を設定し、避難訓練・避難場所の確認を行う。また被災者の救助のための救急救命訓練を行う。
- 2、起震車による地震体験訓練
地震体験車「ごりよう君」に乗って、3方向の揺れと震度7までを段階的に体験する。
- 3、ライフジャケット着脱訓練

概要

- 1、緊急時に人命救助にあたるための心構え、南海・東南海地震への備えと、ライフジャケットの正しい着用方法の体験から被災時にとるべき行動を確認した。
- 2、在校時に災害が起こった時の避難場所までの経路を確認するとともに、在宅時の避難場所や家族との連絡方法を確認した。

参加者の感想

- ・今日学んだことをしっかり覚えておいて、もし、そんなことが起きたら活用しようと思うし、少しでも困っている人がいたら絶対助けたいと思った。
- ・しっかりライフジャケットを着て、身を守ることが大切だと思いました。
- ・地震の揺れを体験して、地震が来たら本当に怖いなと思った。

成果と課題

【成果】

- ・毎年、心肺蘇生法や起震車による地震体験を行っており、年々、生徒達の災害に対する意識は高くなってきている。より具体的な状況を想定し、そのとき取るべき行動を考える機会として、今年度は特別教室棟の4階への避難訓練を行った。

- ・巨大地震に伴う津波発生時に、停電が予想されるため、懐中電灯の明かりの中でライフジャケットの着用体験を行った。ライフジャケットの大切さを理解すると共に、実際に着用してみることで緊急時の安全対策を実感できたようである。
- ・生徒は、災害発生時に自分の身を守ること、被災者を助けること、ボランティアとして人々をサポートすること等について、一つ一つ自分たちのとるべき行動や、担うべき役割を確認できたようである。また、家族との連絡方法や落ち合う場所を決めておくことの大切さも認識したようである。

【課題】

- ・夜間定時制であるため、暗闇の中での避難や安否確認など、想定される状況についてもっと意識させるような取組を行っていくことが大切である。特に、夜間下校時の被災時の避難行動について、個々の確認作業が必要と考えられる。
- ・生徒は、訓練でも真面目に取り組んでいるが、目的の理解が不十分で、真剣味に欠ける部分があることも否めない。いかに自分のこととしてとらえ、より高い意識で訓練に臨ませるかが今後の課題である。



【救急救命訓練】



【避難訓練】

日高高等学校中津分校

実施日時	令和6年11月5日（火）
参加者	生徒43名、教職員8名 計51名
実施内容	避難訓練、消火訓練、自衛隊和歌山地方協力本部による防災スクール

ねらい

自然災害に備えるだけではなく、日常生活における緊急対応を含め、防災意識を高め、地域防災の担い手として行動し、社会貢献できる高校生の育成を目指す。

主なプログラム

- 1 避難訓練
- 2 消火訓練
- 3 防災講話
- 4 止血法講習
- 5 担架づくり、搬送講習、スリッパ作り
- 6 救急法講習（心肺蘇生法・AED）
- 7 感想及び振り返り

概要

職員による避難訓練、消火訓練を行い、分校体育館で全校生徒および教職員を対象に自衛隊員から講習を受ける。

参加者の感想

- ・止血方法、担架の作り方を身の回りにある物でできたので覚えておきたいと思った。
- ・人を助ける方法を教えてもらい、知識と技術が身についた。緊急時に発揮できるように復習したい。
- ・以前、習った事は忘れるのでこのように定期的に実習して欲しい。
- ・人を助けることは怖いことですが、助けることを学べて良かった。
- ・消火訓練を初めて行った。消火粉が出る時間が短い事がわかり、消火器の使用方も理解できたので、もしもの時には的確にできるようにしたい。
- ・細かく話してくれてとても分かりやすく大変ためになった。勇気も持って行動したいと思う。

成果と課題

【成果】

2年前から自衛隊協力のもと計画的に防災意識を高め、防災に対する知識・技術を習得することができている。本校の生徒の実情にあった体験型防災教育を行うことで成果があった。災害時には、まず自分の身の安全を確保した上で、地域と連携し活動ができるようになったと思われる。消火訓練を今年度、初めて行ったが初めての生徒が多く、消火器の特性、扱い方を説明し、生徒、職員全員が訓練を行った。

【課題】

生徒の感想を見てみると、多くの生徒が今回の防災スクールの意義を理解し、研修を受けることができ、好評であった。

毎回、実習内容の見直しを行い実施しているので、3年間で多くの実習ができる様に工夫しているが、本校は寮生も多く、いざという時に的確な行動ができるかどうか日頃の声掛け、指導が大切である。今回は、学校の近隣住民に訓練参加を呼びかけたが参加はなかったため、来年も周知したい。



紀央館高等学校

実施日時	① 令和6年 4月24日(水) ② 令和6年 5月29日(水) ③ 令和6年11月27日(水)
参加者	① 生徒148名、教職員15名 計163名 ② 生徒18名、教職員2名、地域住民等21名 計41名 ③ 生徒219名、教職員17名 計236名
実施内容	① 1年生 地震・津波 避難訓練 ② 湯川幼稚園 2年6組 地震・津波 避難訓練 ③ 2、3年生 シェイクアウト訓練 「津波防災の日」等についての学習 避難場所の確認(避難カードの確認を含む。) 1年生 簡易担架、止血法、ロープワーク、心肺蘇生法

ねらい

- 1、地震による津波や火災に対する知識を確認し適切な行動がとれるようにする。
- 2、地震による津波や火災に対して適切な避難行動がとれるようにする。
- 3、災害発生時における不測事態の対応要領について体験を通じて見識及び知識を醸成する。

主なプログラム

① 地震・津波避難訓練

- ・参加者 1年生148名 教職員15名
- ・開催日 令和6年4月24日(水)
- ・取組 大地震が発生し、その後、津波が発生したと想定し、避難行動の訓練を行う。

② 地震・津波避難訓練

- ・参加者 2年生 18名 教職員 2名 地域住民等21名

- ・開催日 令和6年5月29日(水)
- ・取組 大地震が発生し、その後、津波が発生したと想定し、湯川幼稚園の園児が本校へ避難訓練を行う。本校2年6組の生徒が避難の援助を行う。

③ 「津波防災の日」等についての学習

- ・参加者 全学年219人 教職員17名
- ・開催日 令和6年11月27日(水)
- ・取組 シェイクアウト訓練
「津波防災の日」等についての学習
避難場所の確認
簡易担架、止血法、ロープワーク
心肺蘇生法

概要

① 地震・津波避難訓練

大地震が発生し、大津波警報の発表を受け、本校北の高台(御坊市湯川町富安

方面)に避難する場面を想定して訓練を行った。クラス単位で担任、副担任の指導のもと、実際に歩いて想定された避難経路を確認した。避難場所や避難経路を確認し、円滑に避難できるようにした。また、八幡山や亀山等、標高40m辺りを中心に、学校周辺の地形を確認した。

② 地震・津波避難訓練

大地震が発生し、大津波警報の発表を受け、湯川幼稚園の園児および教員が避難場所に指定されている本校へ避難する場面を想定して訓練を行った。避難してくる園児を、本校生徒が誘導・援助し4階の教室へ避難する訓練を行った。避難場所となっている4階の教室で、避難してきた園児と幼稚園の教員、本校生徒と本校の教員が訓練をふり返り、避難場所や避難経路を確認し、円滑に避難できるようにした。また、学校周辺の地形を確認し、実際の震災に備える訓練を行った。

③ 「津波防災の日」等についての学習

本校は体育祭のため、県内の一斉訓練には参加できず、後日、単独で行った。

2、3年生は大地震が発生したと想定して、身の安全を守るため、シェイクアウト訓練を行った。また、揺れが収まってから速やかに避難できるように窓や戸を開けておくことを心掛けた。その後、放送により津波の恐れがある地震、津波の恐れのない地震、火災が発生した場合について、避難場所や避難経路を確認した。「和歌山県防災ナビ」アプリについて、登録方法や機能について説明した。放送終了後、各クラス単位で担任、副担

任の指導のもと、気象庁制作の映像教材を使用して津波・地震に関する学習を行った。最後に、防災ナビアプリのダウンロード、避難カードの作成を行い、家庭でも避難場所の確認をしておくよう指導した。

1年生は自衛隊御坊地域事務所の協力を得て、防災教育(簡易担架、止血法、ロープワーク、心肺蘇生法)を実施した。

参加者の感想

- 避難の手順がよく理解できた。実際に歩いてみて、避難するまでにどのくらい時間がかかるか体感できた。思ったより時間がかかると感じたが、心の準備が出来安心した。
- 実際に災害が起これば焦ってしまうだろうが、訓練を思い出し落ち着いて行動しようと思った。無事に、はやく逃げられるよう、ハザードマップ、防災グッズの確認など事前の準備が大切だと感じた。
- どのような災害がおこるかで、避難の仕方が違うことや、なぜ違うのかも理解することができた。家族で災害時の避難について、1年に1度は確認をしておこうと思った。
- 高校生の私たちがリーダーとなり、率先して行動し、避難の援助をしたいと思った。家族と避難場所について話し合い、災害発生時に備えて準備をしておこうと思った。
- 実際に防災学習をしてみて、災害時に役に立つ知識や体験をすることが出来た。災害が発生した際には、活用して役立てたい。

・災害は恐ろしいが、正しく理解し対処することで、命を守れることがわかった。いつ災害がおこっても慌てないために、準備をしておこうと思う。

ることで、災害時や緊急時の対応について実践力が高まるとともに、非常時に対する意識が高まった。次年度以降も引き続き実施していきたい。

成果と課題

① 地震・津波避難訓練

新入生に学校周辺の地理状況を認識させ、避難場所の確認をすることができた。訓練は学校周辺の歩道がある安全な経路を歩き、交通量が多くなる地点からは確認だけを行った。

入学してすぐに避難経路を確認すること、実際に歩くことで経路や時間を体感することが大切であると考え。次年度以降も継続していきたい。

② 地震・津波避難訓練

本校は安全性の高い避難場所として指定されており、災害時には近隣の住民が避難してくることが想定される。園児の避難を誘導・援助することで、生徒達が災害時の役割を認識するよい機会となった。次年度以降も継続して実施するとともに、地域住民と連携した避難訓練を工夫し実施していきたい。

③ 「津波防災の日」等についての学習

地震発生時、シェイクアウト行動や、避難のため戸を開ける等、迅速な対応ができた。防災学習がすすみ、生徒たちの知識や理解度も十分高まっているが、災害への再認識をする機会をつくることは必要不可欠であり、大変有意義であると考え。

今年度も自衛隊の協力を得て防災教育を実施した。専門家の指導の下、実際に体験す

南部高等学校

実施日時	令和6年11月1日（金）
参加者	生徒259名、教職員51名、自衛隊員8名 計318名
実施内容	簡易担架作成・止血法・ロープワーク・簡易スリッパ作成 等

ねらい

自然災害に備えて防災意識を高め、地域防災の担い手として社会に貢献できる人材を育成する。

主なプログラム

- 1 講話
- 2 グループごとの実習

概要

- 1 全体に対して災害が発生した時の行動についての講話
- 2 グループごとに「簡易担架」「止血法」「簡易スリッパ作成」「ロープワーク」の実習を行う

参加者の感想

- ・自分の命も大切だけど、他の人の命も大切なので、いざというときはお互い助け合っていたい
- ・知識をふりしぼれば、たくさんのが身近にあるもので活用できるのかなと思いました。
- ・どの知識も災害時に役立つものばかりなので知っていて損はないと思いました。特に木材2本と毛布、または毛布だけでも担架の代わりになると知ってすごいなと思った。

成果と課題

【成果】

4グループに分けることにより、それぞれの実習を短時間の中で行うことができた。
また、実習だけでなく自衛隊の救助活動等の話しを入れてもらいながら行うことができ、防災意識を高めることにつながった。

一人一人が積極的に実習に取り組める環境が作れたため、見ているだけでなく、実技を通して知識や技術を学ぶことができた。

【課題】

1グループあたりの人数を少なくし、さらに実習時間を多くとることで、より実践的な知識や技術を学ぶことができると感じた。実際に救助活動等の実体験をもとにした講話の時間をとることにより、災害時の行動について深めることができたのではないかなと思う。

南部高等学校龍神分校

実施日時	令和6年10月26日（土）
参加者	龍神分校 21名（生徒16、教職員5） 地域住民 28名 龍神中学校 43名（生徒35 職員8） 自衛隊員数名 計92名
実施内容	避難所で役立つグッズ作り、応急手当、担架作り 等

ねらい

- 1 避難所での生活の様子を知ること、避難所で必要なものを知る。
- 2 もしもの時に役立つ知識を学ぶ。

主なプログラム

- 1 防災講話
- 2 避難所で役立つグッズ作り
- 3 応急担架の作り方
- 4 応急処置の仕方
- 5 災害時に出動する自動車の展示

概要

- 1 自衛隊員による防災講話
- 2 身近なものを利用したグッズ作り
ビニール袋を使った防寒具作り
新聞紙を使用したスリッパ
毛布と棒の応急担架の作り方
- 3 応急処置（止血法）の仕方

参加者の感想

- 自衛隊員の方の経験に基づく講話で、救助をするだけでなく、救助活動の最初の道筋をつくることから始まるのがすごいと思った。

- 身の回りにあるもので色々な対策ができることを学んだ。
ビニールが防寒着
新聞紙がスリッパ
担架 毛布と棒など
- 自衛隊車両・先導バイクがすごい。
- 応急処置 止血の仕方は災害時だけでなく知っていると役に立つ。
- 災害時の自衛隊員の大変さ。（最初のルートを作る）

成果と課題

【成果】

地域と学校が一体となって、1人1人ができることを確認できた。

【課題】

- 龍神地区の地域的な特徴で、道路が寸断されると救援を待つ間はその地域で耐えなければいけないので、自分たちでできること考える。
- 防災意識の低下を防ぐ。
- 小学生・中学生・高校生と各成長段階における避難所での役割分担。
- 高校生の役割はおおきい。
- 龍神村の高校生が減らないように。

参考写真



田辺高等学校・田辺中学校

実施日時	令和6年11月5日（火）、11月7日（木）
参加者	生徒 356 名、教職員 16 名 計 372 名
実施内容	・「重ねるハザードマップ」を利用したリスク管理(避難など) ・簡易トイレづくり ・避難訓練 ・紀伊田辺駅での避難訓練(JR 西日本協力) ・防災講演会(大和田 新 氏（フリーアナウンサー）による講演)

ねらい

- 1 紀伊半島は、地震・津波だけでなく、台風などによる土砂災害のリスクも大きい地域であることを認識し、自分の住んでいる地域でどのようなリスクがあるかを確認し、適切な避難行動などをとることができる。
- 2 中学生や高校生が避難時や避難所で出来る役割を理解し、率先した行動をとる。

主なプログラム

- 1 11月5日 1限
「土砂災害」「避難所のトイレ」
- 2 11月5日 2限 全校避難訓練
- 3 11月7日 6限・7限 防災講演会

概要

1 「土砂災害」「避難所のトイレ」

①土砂災害のリスクと避難

学校作成の土砂災害の映像（5分）を放映し、土砂災害の恐ろしさを学んだ。国土交通省の「重ねるハザードマップ」を用いて、本校周辺の土砂災害のリスクを把握した。

②避難所のトイレ事情と簡易トイレの重要性

内閣府の「避難所におけるトイレの確保・管理ガイドライン」を用いて、避難所のトイレ事情と健康リスク、簡易トイレの重要性を確認した。また、和歌山大学防災教育センター作成のマニュアルによる簡易ト

イレづくり（約800個）を行った。

2 全校避難訓練

地震発生時の避難訓練と大津波警報発令時の高所避難訓練を行う。

3 防災講演会

◆並行して JR 西日本による防災スクール

発災時に乗務員だけでは対応できないので、高校生も率先者として避難はしごの設置や乗客の誘導に協力することの意義を学ぶ。



参加者の感想

- ・毎日利用している駅で地震などの災害に遭ったときに、どのように行動すれば分かって良かった。
- ・ハザードマップで自分の自宅の周辺ではどのような災害が予想されるのかが分かって参考になった。

成果と課題

【成果】災害が発生したときに、どのような行動を取るべきなのかを、色々な場面で認識することができた。

【課題】事前学習にもう少し時間をとることができれば良かった。

田辺工業高等学校

実施日時	令和7年1月28日(火)
参加者	生徒140名、教職員10名
実施内容	段ボールベッド作り、止血法、ロープワーク、担架作り 等

ねらい

- 1 災害発生時に備えて、応急処置や避難所生活の知識など、生徒たちに生き抜く力を身につけさせる。

主なプログラム

- 1 講演
- 2 段ボールベッド作成、止血法、ロープワーク(止血法)、担架作り、モールス信号

概要

- 1 災害時における自衛隊の活動について全体で聴講
- 2 各クラスで4班に分かれ、各パートで体験学習

参加者の感想

- ・止血方法を覚えた。脈を測ることが難しかったが本番のために覚えておきたい。
- ・毛布で作った担架の簡単さに驚いた。
- ・自衛隊員の講話を忘れずに覚えておきたい。家族にも話をしたい。

成果と課題

【成果】

- ・4パートで分かれて行うことで、効率よく体験を行うことができた。
- ・実践的な活動をとおして、実際の場面で役立つ知識と意識を持たせることができた。

【課題】

- ・各班とも体育館で一斉に行ったことで、それぞれの声が反響して聞き取りづらい場面があった。
- ・学習班をクラスごとではなく、全クラスを混合のグループにした方が落ち着いて話を聞いた可能性がある。

神島高等学校

実施日時	令和6年11月 5日（火）
参加者	生徒700名、職員55名、計755名
実施内容	津波避難訓練

ねらい

近い将来発生が予想される大地震や大津波から、安全に“逃げ切る！”ため、生徒各自による速やかな避難行動への意識を高める。

主なプログラム

- 1 津波防災啓発動画視聴
- 2 シェイクアウト訓練
- 3 避難経路を各自で選択しての避難訓練
- 4 振り返り

概要

1 事前準備として、5限目に以下の①～③を行い、6限目の訓練後にアンケートを各自で入力するように指示する。

①避難訓練内容・注意点と地図で避難経路と避難先田辺高校下グラウンドの確認をする。

②気象庁制作の津波防災啓発動画「津波に備える」と「津波からにげる」クイズ編を視聴する。

③「世界津波の日」のリーフレットで認識を深める。

2 6限目に「大津波警報発令」と「避難指示」を放送し、各自が「てんでんこ」に田辺高校まで避難を行う。

【想定】最大津波高 12m 5m到達時間 16分
10m到達時間 24分

○担任は、生徒に安全な姿勢をとるよう指示。

（シェイクアウト訓練）

○生徒・職員は、正門または通用門から出て、各

自速やかに田辺高校へ向かってかけ足で避難を開始する。田辺高校下グラウンドを目的地とする。

○目的地の入り口にスポーツタイマーを置き、各自、時刻を確認する。

○点呼が終わったクラスは、田辺高校からさらに避難が必要になった場合の二次避難場所（田辺市役所）への経路を確認し、歩いて帰校する。

○帰校後、アンケートを Forms に入力して終了。

参加者の感想

- ・あまり逃げる道を決めていなかったなので、みんなについて行くだけになってしまい、細い危ない道を通ってしまったので、自分で調べて安全な道を通ることが大切だなと思いました。
- ・危険な道は無いと思っていたけれど、多くの人移動することで混み合い、転倒などしてしまう危険性があると感じた。
- ・今日は先頭を走っていたから人の混雑とかなかったけど、実際に起こった時には、地域の人たちも多いから混雑した時にどうするか考えようと思った。しかも、実際に起こった時、こんな冷静にいれないと思うからそこも考えないといけない。
- ・混雑はしていたけど思っていたよりもはやく着くことが出来たので良かったと思った。だけでもっと早く着く必要があるとも思った。
- ・細い道が多いので、倒壊してこないか注意しながら避難したい。
- ・自分の住んでいる地域も海が近く、何度も避難訓練をしていて慣れていますが、別の場所だと同

じようにはいかず、人数が多いので人どうしの事故に気をつけなければいけないと思った。

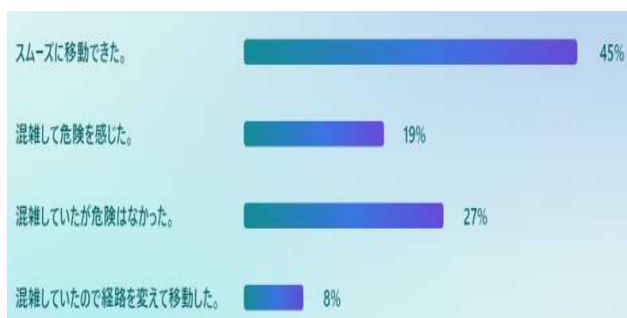
- 自分は神島周辺の逃げ道をちゃんと理解していないので、防災マップを見たり、実際に確認したりすることが大切だと思いました。
- 実際津波が到着する速さはわからないので焦らないように速く避難場所に到着するのがいいと思った。
- 全体的に避難のペースが遅く、真剣に取り組む人とそうでない人との差が現れてたと思う。歩くときは、なるべく早歩きで避難するべきだと思う。また自分も私語はなるべく慎み、周りに速やかな避難を呼び掛けることが大切だと思った。
- 早く行けそうだと思って道を変えたところが案外遠回りだったりしたことを今回の訓練で知れて良かった。
- 他の人たちが訓練というだけあって、走って避難していたのでそれにつられて私たちが走って避難できた。次は自分から率先していきたい。靴紐がほどけたりしたのでしっかり日頃から結んでおきたい。

成果と課題

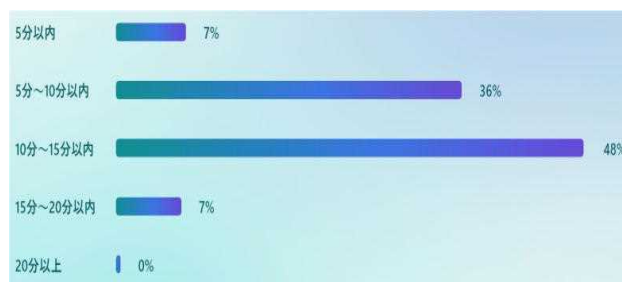
【成果】

○アンケートより

①教室から校舎の外に出るまでの移動はどのようにできましたか？



②今回の目的地（田辺高校下グラウンド）までの移動について、時間はどれくらいかかりましたか？



校舎内の移動については、「スムーズに移動できた」と回答した割合が昨年度とほぼ同じで、「混雑していたので経路を変えて移動した」が5%から8%に増加した。

今回の訓練で、津波到達時間の想定を、5mの第1波が16分、10mの第2波が24分と想定し行いましたが、ほとんどの生徒が第1波到達までに避難することができたが、全員が無事避難するためには、今後も訓練を重ねることが重要である。

警察署の2名の署員が来てくださり、交通整理等にご協力いただき、無事に訓練を終えることができた。

【課題】

南海トラフの巨大地震が発生した場合の津波到達時間は、3mの波が15分、最大12mの波が26分と想定されているが、避難に15分以上かかっている生徒が7%いるので、全員無事避難できるように訓練を重ねる必要がある。

避難経路には、狭い道が多く、民家や塀が迫っており、危険な場所が多いことを生徒は認識したようだ。迷ってしまう生徒や混雑してルート変更した生徒も何人かいたようで、日頃からルートを確認しておく必要がある。

4月当初には、新入生の避難経路の確認を実施した。海に近い場所にある本校にとって、津波避難訓練は必要不可欠であることから、来年度も訓練を計画している。

熊野高等学校

実施日時	① 令和6年11月 5日(火) ② 令和7年 3月13日(木)・18(火)
参加者	① 生徒554名(高1・2・3・専1)、教職員60名 計614名 ② 生徒184名(高2)、教職員20名 計204名
実施内容	① 地震・津波避難訓練 ② 救急救命講習

ねらい

① 地震・津波避難訓練

「世界津波の日」に避難訓練を実施することにより、先人を偲び地域防災の担い手となる意識を育む。

② 救急救命講習

日常生活における事故防止の訓練を実施することにより、地域防災の担い手となる意識を育む。

主なプログラム

① 地震・津波避難訓練

- ・情報伝達訓練
- ・シェイクアウト訓練
- ・避難訓練
- ・防災ミニ講座

② 救急救命講習

- ・応急手当の必要性(ビデオ講習)
- ・心肺蘇生法(説明・実技)
- ・AED(説明・実技)
- ・異物除去および止血法(説明・実技)

概要

① 地震・津波避難訓練

全校生を対象に(専2を除く)行った。気象庁による訓練用の緊急地震速報発表と

同時に机の下に隠れて身の安全を確保し、避難経路を通過してグラウンドへ移動した。安否確認を行った後、県より配布された「世界津波の日」リーフレットを利用して、本校社会科教諭が濱口梧陵の偉業と津波避難3原則等について説明を行った。



② 救急救命講習

2年生を対象に心肺蘇生法およびAEDの操作方法に関する実技講習を受けた。毎年、田辺消防署上富田分署の隊員の方々からきめ細やかな指導を受けられる貴重な機会となっている。また、本校サポーターズリーダー部が作成したAEDシートについても使用方法が部員から説明があった。3クラスずつ2日に分けて講習が実施された。



参加者の感想

① 地震・津波避難訓練

避難訓練は、訓練と思わず実際に起こったかのようにするのが大事だと分かった。私達は助けられる存在ではなく、濱口梧陵さんのように周りの人を助けられるようになるべきだ。率先避難者になることはすごく大切で、想定にとらわれず逃げようと思う（高3女子）。

② 救急救命講習

講習で、いざ実際に目の前で起こった時には周りの人と協力しながら救命処置が出来るようになったのが良かった。今日は練習だったが、本番はあせらず冷静に人を助けられるようになりたいので、これからも忘れないようにしたい（高2女子）。

成果と課題

① 地震・津波避難訓練

【成果】

生徒に事前に知らせず抜き打ちで行ったため、緊張感を持って実施できたようだ。改めて濱口梧陵の偉業、津波避難3原則の確認することが出来たのは有意義であった。

【課題】

地域防災の担い手としての自覚を高めるためには、もっと大規模に行う必要がある。本校では3年に一度、上富田町と合同防災訓練を実施する予定である。

② 救急救命講習

【成果】

全員が実技を行うということもあり、和やかななかにも緊張感の感じられる有意義な講習であった。過去に経験がある生徒も多いようだが、高校生として改めて講習を受けることで、その知識や技術が定着したと思われる。今後も大切な講習として続けていきたい。

【課題】

いざという時に落ち着いて行動するためにも、定期的に講習を受けるべきである。地域防災の担い手としての自覚を高める工夫が必要である。

串本古座高等学校

実施日時	令和6年 8月 2日（金）
参加者	生徒70名 教職員 9名 計79名
実施内容	避難はしご組み立て、飛び降り体験、津波避難訓練など

ねらい

- 1、多様な防災の知識を身につけ、さまざまな状況の災害に対応できる力を養う。
- 2、鉄道乗車中の災害時に生徒自身が地域の率先避難者となれるよう防災意識を高める。

主なプログラム

- 1、紙芝居や列車を使用し、避難はしごの使い方や飛び降り体験を行う。
- 2、南海トラフ地震を想定した避難訓練を実施。

概要

- 1、避難はしご組み立て
列車内に備え付けられた災害時の車外への避難用のはしごの使い方を学んだ。
- 2、津波避難
列車乗車中に地震とそれに伴う津波が発生したことを想定し、避難はしごを用いた列車外への降車、列車からの飛び降り体験をした。
- 3、感想文記入

参加者の感想

- ・電車内で災害が起きることを考えたことがなかったので、学ぶことができてよかった。
- ・電車内のドアコックの開け方、避難はしごの使い方を初めて知ることができた。
- ・普段電車通学なので、地震が起こった場合の避難の仕方がわかってよかった。
- ・率先避難者として自分のできることをしっかりと行い、一人でも多くの命を救うことができれば。
- ・目の不自由な人やお年寄りの人たちも一緒に逃げられるようにしたい。
- ・逃げる方向を示す矢印があることを知れてよかった。

成果と課題

【成果】

本校は沿岸部に位置しており、南海トラフ巨大地震等でも津波による浸水被害、液状化現象等が予想される地域であることから、地震津波に関して日頃から関心を持ち防災教育を行っている。今年度も、昨年に引き続いて JR 西日本との協力で、津波災害を想定した列車からの避難について学習を行った。本校には多くの列車通学生が在籍しており、列車を利用する生徒が災害発生時に地域の率先避難者となるよう避難はしごの利用訓練や飛び降り体験、津波避難訓練を行った。また、事前学習により、南海トラフ巨大地震への備えについて学習した。生徒からは「電車内で災害が起こることを考えたことがなかったのが良い機会となった」「実際に体験する形で訓練することができたので今後も続けてほしい」などの感想が寄せられた。

【課題】

本校の立地から、巨大地震発生時の対応について不安を感じている職員・生徒も多い。本校が3～5Mの浸水域にあり、1cm以上の津波が最短8分で到着する場所にあることや、串本町内の県道・国道の55%が30cm以上の浸水、21%で液状化が起こると予測されていることから、大変深刻な立地条件であることを全職員で共通理解しなければならない。今後は、本校に隣接する串本中学校や近隣住民を含めた大規模な避難訓練を計画していくべきであるとする。

新宮高等学校

実施日時	令和6年10月16日(水) 13:10~15:40
参加者	生徒181名、教職員11名、計192名
実施内容	ライフハック、ロープワーク、心肺蘇生法、AED 取り扱い、搬送法、応急手当 等

ねらい

「県高校生防災スクール」事業の一環であり、講義や訓練を通して高校生の防災意識を高め、地域防災リーダーとして災害時に活動出来るような生徒の育成を目的とする。

主なプログラム

- 1 事前学習(消防署、自衛隊)
- 2 自衛隊によるライフハック、ロープワーク
- 3 消防署による心肺蘇生法、AED 取り扱い、搬送法、応急手当

概要

- 1 事前学習は学年全員で受講。当日の説明を含む防災全般の講義を聞いた。
- 2 事前学習の後、学年生徒が4つの班に分かれて消防署、自衛隊による講習に参加した。

参加者の感想

- ・消防の方や自衛隊の方の講演を聞いて、公助には限界があること、自助や共助は普段から作り上げるものだということを学びました。それを意識して生活しようと思いました。

- ・日本は災害大国で、いつ何が起きるか分からないため日頃から自分の命を守る知識をつけておくことが大切だと思った。
- ・自分たちでもできる応急手当をするだけで、その人が生きる確率がぐっと上がるのだなと思った。
- ・心肺蘇生法はどの方法においても周囲の人々との連携が大切なので任せられたときに即座に対応できるようにしたい。
- ・搬送の仕方は、一人の場合や二人の場合など色々な方法があることを学んだ。小さい人でも大きい人を運べる方法があることに驚いた。もし人が倒れているところに遭遇したら、その場に合った搬送方法で対応したい。

成果と課題

【成果】

- ・事前学習で消防や自衛隊から災害時の状況を話してもらうことにより、災害を他人事ではなく自分事として意識できるようになった。
- ・ロープや AED などを扱うことにより、それを実際に扱うことになった場面について思いをめぐらすことができた。

【課題】

- ロープワークなどは少人数で学んだ方がより効果的だと思った。手の動きが慣れるまでは難しく、苦戦する生徒が多かった。
- 前回の防災スクールでも課題とされていたが、時間の都合で4つある活動のうち各クラスで2つずつしか体験できなかった。どの活動も体験しておくべきものなので時間を調整することが望ましい。



新宮高等学校定時制

実施日時	令和6年12月20日（金）
参加者	生徒24名、教職員8名
実施内容	津波避難訓練、防災避難訓練、非常食炊き出し訓練、防災クイズ（ビデオ）による学習

ねらい

- 1、防災に関する意識を高める。
- 2、被災時に救援活動に参加する意識と技術を身につけさせる。

主なプログラム

訓練① 9月4日（水）

18:00 火災警報発令緊急放送「これは訓練です。校舎第3棟より出火しました。現在まだ火災は大きくなっていません。生徒諸君は担任の先生の指示に従って、すみやかに体育館前に避難してください。」

生徒は担任の誘導で体育館前に避難する。

同時に教頭より新宮消防署に通報訓練。

18:30 消火訓練 その場で消火器の使い方等を説明し、理解を深める。

19:00 火災からの避難についてのビデオ鑑賞

訓練② 11月6日（水）

18:00 緊急地震速報訓練放送・机の下等に避難（シェイクアウト）

18:10 担任の指示で避難開始
（停電を想定して廊下・ベランダの電灯は消しておく）

（避難の際、HRにある常備灯をクラス代表者が持って避難する。HRを消灯する 担任）

3棟東側屋上に出て、整列、担任点呼、防

災担当者に報告。

18:30 視聴覚教室3に集合、防災係より講話、ビデオ鑑賞。

訓練③ 12月20日（金） ビデオによる「防災クイズ」と炊き出し訓練

18:00 視聴覚教室3に集合、担任点呼の後、アルファ米の炊き出し・配膳訓練

18:20 「防災クイズ」

19:00 その場で感想文記入

概要

- 1、火災発生を想定した避難訓練・消火訓練、煙体験と防災学習（火災からの避難についてのビデオ鑑賞）
- 2、世界津波の日における、授業中の停電を想定した地震・津波避難訓練
- 3、「防災クイズ」のビデオ鑑賞。炊き出し訓練

参加者の感想

- 避難訓練や防災学習をした1年を通して、知っているようで知らなかった事が意外と多かったのも、もっとたくさんを知らなければいけないと思った。（2年女子）
- 1年を通して、防災について知って良かった

たことがたくさんありました。自分が避難する場所やルートについて改めて考えることができました。(3年男子)

- These evacuation drills and disaster prevention lessons are very important for us to learn what to do during certain situations such as natural disasters.

[こうした避難訓練や防災の授業は、自然災害などの状況で何をすべきかを学ぶ上で非常に重要だと思いました。]

(3年女子)

- 地震や津波は自然現象なので、いつ起こるかわからないので、日頃から避難訓練や防災グッズを常備しておくことが大切だなと思いました。(1年女子)

成果と課題

【成果】

- 1年間の取組を通して、防災に関する意識と知識を高めることが出来た。
- 災害時の避難場所と避難の方法を理解習得させることが出来た。

【課題】

- 生徒会と連携し、いっそう生徒の自主性が発揮できる内容を模索したい。
- 外部講師の活用なども考えていきたい。



アルファ米の炊き出し訓練



防災クイズに挑戦



消防署員から消火器の取り扱いの説明を受ける



夜の校舎屋上に避難

新翔高等学校

実施日時	令和7年1月24日（金）
参加者	本校生徒82名・教職員10名 みくまの支援学校生徒3名・教職員1名 地域住民等1名 計97名
実施内容	講話（災害に対する心構え）、応急手当・救急法、ロープワーク、ライフハック

ねらい

- 1 近い将来予想される南海トラフ地震をはじめ、自然災害に備えて本校生徒の防災への意識を高める。
- 2 地域防災の担い手として社会貢献できる青少年の育成を目的とし、関係機関と連携をしながら防災・減災に関するより専門的な知識や技術を習得し、地域防災リーダーの育成を図る。

主なプログラム

- 1 自衛隊による講話
(1) 災害に対する心構え
- 2 自衛隊による災害時における防災訓練
(1) 応急手当・救急法
(2) ロープワーク
(3) ライフハック

概要

- 1 1学年82名・教員10名、みくまの支援学校生徒3名・教職員1名、地域住民等1名で災害に対する心構えについて学習する。
- 2 各クラスで応急手当・救急法、ロープワーク、ライフハックの分野に分かれて自衛隊による防災訓練に参加した。各部門40分とし、ローテーションで実施した。

参加者の感想

- 1 応急手当・救急法
(1) 倒れている人を見つけてから、救急車が来るまでの流れを改めて学べて良かった。
(2) 怪我した人を棒と毛布を使って運ぶ方法を実際に体験した。様々な運び方を教えてくれて、詳しく知ることができた。
- 2 ロープワーク
(1) 知らない結び方がたくさんあった。難しかったけど、覚えておくと便利だと思った。
(2) 自衛隊の人は、簡単に結んでいたが実際にやってみると難しかった。丁寧に教えてくれたので楽しくできた。
- 3 ライフハック
(1) 身近にあるサランラップ等を災害時に利用する方法を知った。
(2) 袋の中でお湯が沸騰していてすごかった。非常食の種類が思っていたよりも多くて驚いた。

成果と課題

【成果】

今年度も自衛隊の協力を得て、生徒に様々な体験をさせることができた。実際に災害が発生したときの対応について学ぶことができた。また、そのときにどのように行動すべきかを考える機会もあり、「自助・共助」の精神を養うことができた。当日の様子や事後の感想からも、生徒が真剣に取り組んでいたことがわかる。

今回はみくまの支援学校、地域の方も参加し、生徒と地域の方が協力し合うところが見えた。今後も学校・地域が一体となった防災スクールをめざす。



【課題】

実際の災害が起こったときに実践できるかが重要であり、今回学んだことがスキルとして定着できるよう継続した訓練が必要である。来年度は可能な範囲で、地域や近隣校との連携、そして、継続した訓練を進めていくことを考える。



伊都中央高等学校

実施日時	令和6年9月20日（金）
参加者	生徒150名、教職員30名、計180名
実施内容	地震体験車、簡易ランタン、簡易トイレ作り、きいちゃんの災害避難ゲーム、非常食の紹介等

ねらい

- 1 近い将来予想される南海トラフ大地震を始め、自然災害に備えて高校生の防災への意識を高め、地域防災の担い手として社会貢献できる青少年の育成を目的とする。

主なプログラム

- 1 地震体験車「ごりょうくん」で地震体験
- 2 簡易ランタン・トイレ作製、和歌山防災ナビ紹介
- 3 「今から1分後に大災害が起こったら」DVD視聴
- 4 きいちゃんの災害避難ゲーム
- 5 非常食（アルファ化米・個包装）の紹介・持ち帰り
- 5 振り返り、感想記入

概要

- 1 昼間コースと夜間コースに分かれて実施した。
- 2 昼間コースは学年単位で動き、それぞれのプログラムの体験をローテーションを組んで実施した。
- 3 簡易ランタン・トイレ作製、防災ナビの紹介はコミュニティホールにて、地震体験車は体育館前にて、きいちゃんの災害避難ゲームは各HR教室、DVD視聴は視聴覚教室にて実施した。

参加者の感想

<地震体験車ごりょうくん>

- ・大きな地震を初めて体験したので、家具の固定や防災グッズを備えようと思った。
- ・震度6を体験し、思っていた以上に強い揺れで怖かった。
- ・震度6の揺れを知ることができ、もっと対策をしていきたいと感じた。

<きいちゃん災害避難ゲーム>

- ・避難所を運営する場合は、いろんな人の配慮を考えなければいけないのは大変だと思った。

- ・自分にはまだまだ知識が足りていないと感じたので、また自分で調べてみようと思えるいい機会になった。
- ・避難所運営の難しさを知ることができた。
- ・ゲームであっても、みんなで会話をし、答えをみつけていくことに意味があると思った。
- ・避難所においても、課題は多いことに気づいた。

<「今から1分後に大災害がおこったら」DVD>

- ・津波の実験で、20cmと40cmとの津波の威力の違いが大きいことに、驚いた。
- ・自分の知っていた情報は古いことが分かり、もっと正しい知識をもちたい。
- ・防災学習の大切さを知れたので、自分でも調べてみたい。
- ・災害時に自分の命を守る行動をとり、最善を尽くせるように、もっと学びたい。

<防災グッズ製作・和歌山防災アプリについて>

- ・簡易トイレの作り方を忘れないために、普段からゴミ入れとして使えそうなので、折り方を覚えて活用したい。
- ・電池の入らない懐中電灯をもらえて、とても便利だと思った。
- ・身近にあるもので、防災グッズが作れることを知れてよかった。
- ・家族で防災アプリを入れようと思った。

成果と課題

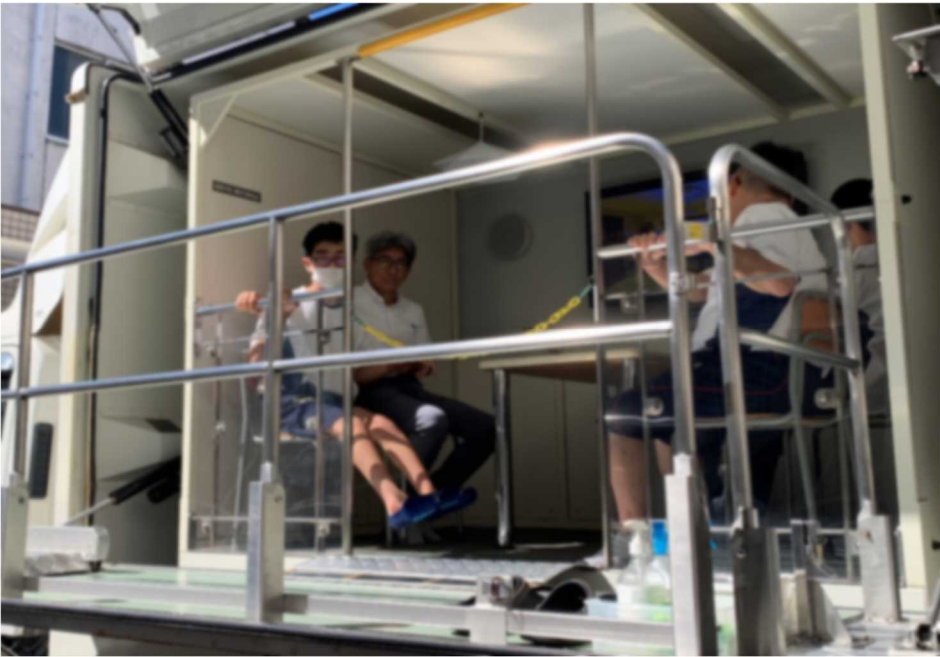
【成果】

- ・2年生以上は昨年も地震体験車で体験を実施したが、南海トラフ地震を想定しての体験として、真剣に取り組むことができていた。
- ・きいちゃんの災害避難ゲームは、運営する立場を自分ごととして考え、取り組むことができていた。
- ・仲間とともに取り組むプログラムが多くすることで、コミュニケーション力を養い、自分と違う意見も尊重する態度を身につけることができた。
- ・身近なもので防災グッズを作れることで、家でも準備できると感じた生徒が多かった。

【課題】

- ・地域の防災課題に取り組むなど、より地域に目を向けた防災活動を検討していきたい。





きのくに青雲高等学校（定時制）

実施日時	令和6年5月22日（水）
参加者	生徒127名、教職員40名、地域住民2名 計169名
実施内容	大地震に関する講演 マンホールトイレ 心肺蘇生 AED体験 等

ねらい

- 1 近い将来発生が危惧される南海トラフ地震をはじめ自然災害に備え、生徒の防災意識を高める。
- 2 地域防災の担い手として社会貢献できる生徒の育成を目指す。

主なプログラム

- 1 大地震に関する講演
- 2 マンホールトイレ設営体験
- 3 段ボールパーティション・ベッド設営体験
- 4 心肺蘇生・AED体験

概要

- 1 建造物破壊や津波による被害の減災、家庭における防災準備について
- 2 和歌山市総合防災課の方からの説明と生徒による実演
- 3 和歌山市地域安全課の方からの説明と生徒による実演
- 4 和歌山市消防局より人形、AED、DVDを借りて、本校職員による説明と生徒による実演

参加者感想文

- ・大地震の怖さを全身で感じた。いざとなったとき自分の身は自分で守れるようにな

ろうと思い、もっと知識をつけたい、学びたいと思いました。

- ・マンホールトイレの存在を知って、画期的に感じた。
- ・段ボールベッドの頑丈さに驚いた。
- ・心肺蘇生のやり方がわかりやすかった。
- ・防災準備をしようと思った。家族で話して避難先を決めようと思った。

成果と課題

【成果】

- ・各プログラムに対して、参加者の約90%が肯定的な意見を回答した。講義形式ではなく、体験形式を重視するプログラムであったのも本校の生徒には合っていたように思う。一人一人が災害を他人事とは考えず、自分自身にも起こり得るものと受け止め、避難所生活を余儀なくされた場合のおおよそのイメージはつかめたと考える。

【課題】

- ・上級生になればなるほど欠席率が上がった。今までの学校生活で経験した防災関連の取り組みで自己満足したためと考えられる。今後は本校生徒の特性に合った、また、興味の湧くような取り組みを計画し、防災意識を高めたい。

きのくに青雲高等学校（通信制課程）

実施日時	① 令和6年5月26日（日）、② 令和6年6月2日（日）
参加者	① 生徒181名、教職員26名、計207名 ② 生徒91名、教職員20名、計111名
実施内容	① 避難訓練及び講話 ② 地震、防災に関する映像教材や講義

ねらい

- ① 避難経路の確認をするとともに、迅速な避難行動の習得や安全意識の向上を図る。
- ② 大震災に関する映像教材や実演講義、語り部からの体験談などを通して、地震被害の大きさや、被災者の思いを知るとともに、防災・減災意識の醸成を図る。

主なプログラム

- ① 避難訓練、能登半島地震に関する講話、防災ハンドブックの配布及び説明による学習プログラム
- ② 兵庫県神戸市にある「人と防災未来センター」を訪れ、阪神・淡路大震災に係る映像や講話及び耐震・免震構造の実験などによる学習プログラム

概要

- ① 地震発生放送後、机の下に避難し、揺れが収まった時点（放送が入る）で避難経路を確認しつつ、グラウンドに集合。その場で、能登半島地震を体験した校長の講話があり、最後に防災ハンドブックの配布及び説明を行った。



② 「人と防災未来センター」にて、震災の恐ろしさが伝わる映像や被災者が感じたであろう気持ちなどを学習した。その際、本校が独自に作成したワークシートを活用することで、震災関連の資料や展示物をより丁寧に閲覧させることができた。その結果、生徒たちは、地震被害の大きさや、かけがえのない人を失った悲しみ、家族の絆や助け合いの大切さなど、被災者の思いについて、より深く学習する事ができた。また、建物の耐震、免震構造や液状化の仕組みのほか、家庭で備える防災グッズや家具固定についても学習した。最後に、震災を体験した方の講話を聞くことで、今までの全学習プログラムの学びがつながり、生徒の防災・減災意識の向上を図ることができた。



参加者の感想

- 人と防災未来センターでは、地震に備えることの大切さと人と助け合い協力し合うことの大切さを学びました。避難所でも、大変なこと、つらいことが積み重なるとは思いますが、そんなときでも助け合い、お互いの命を守っていくことができるような人になりたいと思います。地震だけではなく他の自然災害ともしっかりと向き合えるようになりたいと思いました。
- 南海トラフ地震について、和歌山にいると色々聞きますが、阪神・淡路大震災の話聞いて、自分の中で災害が来ても大丈夫と思っていた部分の準備不足があると考えました。今回学んだ減災グッズや自助・共助など、自分だけではなく、家族も一緒にできるよう、家でしっかり話し合いたいなと思いました。

- 「人と防災未来センター」では、いざというときの備えや、避難場所の確保などの減災をするための知識を得て、今の備えや対策が不十分だと痛感しました。
また、実際に経験した方の話を聞いて、固定されていない物が凶器にもなったりすることがわかったので、あまり物を置かないことやタンスなどを固定すると良いと考えることができて、とても有意義な時間でした。
- 人と防災未来センターにて、改めて災害の恐ろしさや被害の強烈さを学びました。映像を通して本物の声を聞いて、これまで学んできた防災について、足りていない部分も足りている部分も両方まとめて振り返ることができて良かったと思いました。

成果と課題

【成果】

- 生徒の防災意識や減災意識の向上を図ることができた。
- 自助・共助について学習し、協力し合う大切さを再認識させることができた。
- 南海トラフ地震に対する危機意識を高めることができた。
- 教職員の役割分担を再認識することができ、教員間の連携を強化することができた。
- 避難経路や避難場所の確認と実際の行動の確認をすることができた。

【課題】

- 通信制課程の学習システムでは、全生徒が出席する必要がないため、難訓練等の防災学習については、その日に出席している生徒だけに限定される。
- 震災などの災害が起きた際、通信制課程では生徒の出席状況を即時に把握することが難しいため、安否確認を迅速に行うことができない。

南紀高等学校

実施日時	令和6年4月16日（火）～10月29日（火）
参加者	生徒107名、教職員25名 計132名（延べ人数）
実施内容	津波避難訓練、避難所運営ゲーム訓練、 救急救命講習、アルファ米作り、映像視聴 等

ねらい

1. 実施形態

定時制昼間部、定時制夜間部の課程別にそれぞれの生徒の実態に即した実施形態とするため、特定の日に絞らず、複数回に分散して実施。生徒指導部を中心に担任や関連教科の教員が担当を分担する形式で準備を進めた。

2. 使用教材

「きいちゃんの災害避難ゲーム」、防災ハンドブック、世界津波の日パンフレット等

2. 10月1日（火）（昼間定時制）

火災を想定した避難訓練を実施。事務室付近での火災に伴う避難経路の確認を行った。

【生徒85名】

3. 10月1日（火）（夜間定時制）

大地震後の停電と津波を想定し、屋上への避難を実施。夜間定時制の活動時間を踏まえ、暗闇の中を非常用ライトで照らしながらの避難を試みた。【生徒19名】

4. 10月4日（金）、18日（金）（昼間定時制）

田辺市消防本部による救急救命講習の事前学習として、Eラーニングによるビデオ学習及びテストを受講した。【生徒28名】

5. 10月29日（火）（昼間定時制）

1年生は、田辺市消防本部による救急救命講習を受講。AEDの使用法、胸部圧迫法、止血法等を学習した。

2年生は、西牟婁振興局からお借りした「きいちゃんの災害避難ゲーム」を用いて、災害避難に関する事前準備の大切さを学ぶ。また、災害時を想定し、アルファ米を水から作成した。

3、4年生は、「きいちゃんの災害避難ゲーム」を用いて、様々な状況に応じて、どう避難所を運営していくか、また避難する上でどういうことが重要になるかについて学んだ。あわせてアルファ米を作成した。【生徒85名】

主なプログラム

1. 防災点検（夜間定時制）
2. 火災避難訓練（昼間定時制）
3. 大地震・津波避難訓練（夜間定時制）
4. 救急救命講習事前学習（昼間定時制）
5. 救急救命講習及び「きいちゃんの災害避難ゲーム」（昼間定時制）
6. 「きいちゃんの災害避難ゲーム」（夜間定時制）

概要

1. 4月16日（火）（夜間定時制）

大地震や津波などの災害が発生した場合に備え、非常用ライトの点検と点灯を行い、実際に非常用ライトの照明のみを頼りに校内を巡りながら、避難場所やAEDの設置場所・防災倉庫の場所の確認を行った。

【生徒21名】

6. 10月3日(木) (夜間定時制)

「きいちゃんの災害避難ゲーム」を用いて津波が起きた場合に直面する様々な状況に対して、どのように対応しその状況を乗り越えていくのかを考えながら、津波避難のシミュレーション学習を行った。【生徒18名】

参加者の感想

- ・事前準備をしないとするのは大きな違いがあった。それを踏まえて日常から何かあった時のために備蓄品を準備すると同時に気持ちの面でも準備をしようと思った。
- ・自分の命を第一に考えたいとも思った。家族やご近所の方の安全も十分大事ですが、周囲の安全を確保するにしても自分の命がなければできないのでそこも考えて判断したいと思いました。
- ・津波が起きた際の命を守る優先順位の大切さが理解できた。
- ・いつどこで起きるかわからないので、日頃から高台、避難場所などの確認の大切さがわかった。

成果と課題

【成果】

- ・災害避難ゲームでは、楽しみながら地震や津波への対応について現実性を持って取り組むことができてよかった。
- ・毎年おこなうことで防災のための意識が高まり「訓練のための訓練」ではなく、日頃から様々な危機意識を持つきっかけができてきている様子がみられつつある。
- ・防災ゲームを通じて適切に避難するなど自らの判断で主体的に行動できる場面などが見られた。また、防災学習を通じて学校生活の中で様々な事に対して友達と協力しながら主体的に取り組める場面が少しずつ見られるように

なってきた。

【課題】

- ・登下校中における各自の避難経路の認識や避難マップの作成など、個人に応じた具体的で実践的な学習内容の充実を図りたい。
- ・被災後の生活は長くなるため社会制度や補償制度について深められるような取組を考えていく必要がある。
- ・安否確認方法(災害伝言ダイヤル)などの使用方法などについても確認していきたい。
- ・災害時には、地域同士での助け合いなどがとても大切になるために、学校周辺地域の方々にも参加をしていただく機会なども考えていきたい。

防災学習の様子



防災点検（夜間定時制）



アルファ米作り（昼間定時制）



きいちゃん災害避難ゲーム（夜間定時制）



きいちゃんの災害避難ゲーム（昼間定時制）



大地震津波避難訓練（夜間定時制）

南紀高等学校 通信制課程

実施日時	令和6年11月10日（日）
参加者	田辺学級生徒20名、新宮学級生徒17名、教職員9名、計46名
実施内容	避難訓練、防災学習

ねらい

近い将来発生が予想される南海トラフ地震を想定して、そのメカニズムや正しい防災の在り方を学び、防災意識の向上を目的とする。

主なプログラム

- ・シェイクアウト訓練
- ・地震・津波についての基礎講座（防災ハンドブック、津波の日リーフレットの配布、地域のハザードマップ等の活用）
- ・啓発DVDの上映

概要

- 1) 地震・津波が発生した場合の避難訓練（概要の説明）
教室の机の下に避難するよう指示
避難経路の確認
- 2) 基礎講座
 - 1 動画「南海トラフ巨大地震」
（約15分）
 - 2 和歌山県における避難先の考え方の説明
 - 3 避難カードについて説明と作成
 - 4 地域のハザードマップの確認

成果と課題

【成果】

具体的な地域の避難場所を知り、地震速報からの一連の動きが体験できている。

【課題】

実際の揺れの激しさや、揺れの時間が体験できるような機会があればと考える。

和歌山盲学校

実施日時	① 令和6年6月24日（月） ② 令和6年9月13日（金） ③ 令和6年9月24日（火） ④ 令和6年11月5日（火）
参加者	① 高等部普通科生徒3名 ② 高等部普通科生徒 ③ 高等部普通科生徒3名 ④ 全校幼児児童生徒25名 教職員名 計70名
実施内容	① 救急救命法 ② 着衣水泳 ③ 非常食炊き出し ④ 地震津波避難訓練

ねらい

- ・非常時の状況を想定した体験活動をもとに、自分たちが非常時にできることや必要なこと、平常時にできる準備などを、より具体的に考える契機とする。

主なプログラム

- ① 救急救命法
- ② 着衣水泳
- ③ 非常食炊き出し
- ④ 地震津波避難訓練

※以下、各項目の詳細

① 救急救命法



【概要】

- ・心肺蘇生法および AED の正しい使い方を知る。

【参加者感想】

- ・心臓マッサージをし続けるのが大変だった。友だちと交代しながら続ける方法を学んだ。
- ・人工呼吸は人形が相手でも抵抗があった。

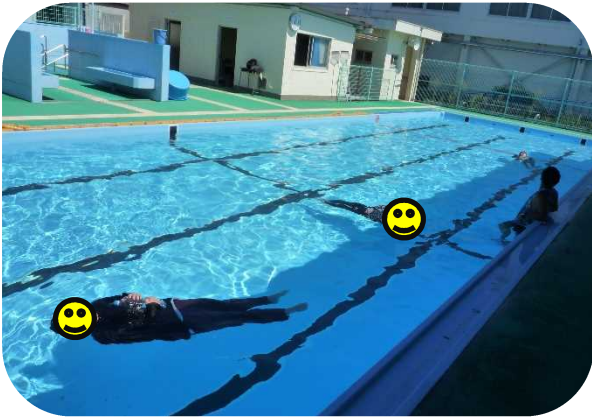
【成果】

- ・胸骨圧迫をする位置、強さ、速度等を知ることができた。また AED の基本的な操作方法を知ることができた。

【課題】

- ・毎年繰り返し取り組むことで、知識や技能の定着を図る必要がある。

② 着衣水泳



【概要】

- ・ 着衣の状態での入水を体験する。

【参加者感想】

- ・ Tシャツなどの上着だけだとそんなに変わらないが、ズボンを穿くとかなり重かった。
- ・ 顔を上にして大の字になり水面から出る面をできるだけ広くして浮くと、浮きやすいことが学べた。

【成果】

- ・ 着衣状態で水中に入った時の、衣服の重さや動きづらさを体感することができた。また救助を待つときの姿勢（浮き方）も実践することができた。

【課題】

- ・ 今回は自分が川や海に落ちた場合の実践を行ったが、一緒に行った友人等が落ちてしまった時の対処も学ぶ必要がある。

③ 非常食炊き出し



【概要】

- ・ α 米を調理し、試食する。

【参加者感想】

- ・ お湯で作った方が美味しかった。
- ・ ふやけていた。
- ・ 思ったより美味しかった。

【成果】

- ・ 日頃口にすることのない非常食を試食する機会になっただけでなく、水とお湯で調理したものを食べ比べたことで、調理方法による違いや味、食感などを知ることができた。非常食を食べたことがあるという経験は、非常時の安心材料のひとつになるのではないかと感じた。

【課題】

- ・ 今回はどの生徒も食べることもできたが、様々な理由で用意された非常食が食べられない方もいるので、平常時に様々な非常食を試しておくことも有効。本校幼児児童の家庭には既に呼びかけているが、中学部・高等部の生徒にも改めてアナウンスしたい。

④ 地震津波避難訓練

【概要】

- 地震が起きた場合を想定した一次避難と、地震によって津波が発生した場合の二次避難を行う。

【参加者感想】

- 府中神社（二次避難場所）まで随分高低差があるとわかった。
- 坂道を登るのが大変だった。

【成果】

- 地震発生～避難まで、具体的なイメージをもつことができた。

【課題】

- 本校の現状や毎年の反省をふまえて、引き続き避難訓練のマニュアルをブラッシュアップしていく。
- 安全かつ迅速に避難する方法を、幼児児童生徒の実態に即して引き続き今後も考える必要がある。

和歌山ろう学校 高等部

実施日時	令和6年8月28日（水）
参加者	生徒10名、教職員16名 計26名
実施内容	火起こし体験・非常食の試食体験

ねらい

- 1 自然災害に備え、火起こしや災害食の炊き出しを体験する。
- 2 火起こしの方法を題材に友達と話しあい、考えた方法を実践することによって、問題解決的な能力を育てる。

主なプログラム

- 1 火起こし体験
- 2 非常食の試食体験

概要

- 1 火起こし体験

事前

①グループで火起こしの方法や必要な道具を相談し準備する。

当日

②グループで火起こしをするためのセッティングを行い、スタートの合図で一定の高さにセットされた麻紐を火で切る競争を行う。

- 2 非常食の試食体験

・起こした火を使って湯を沸かし、非常食の試食体験を行う。

参加者感想文

- ・火起こしの練習をやってみて木を立てたり新聞を丸めたりして火をおこすことが一番苦労したけどなんとか無事に麻紐を切れて良かったです。
- ・ワカメご飯は水に入れて振るだけで簡単に美味しくできたので良かったです。
- ・災害食は硬いと思ったけど、美味しかったので災害が起きた時これを食べても問題ないなと思いました。

成果と課題

【成果】

- アルファ化米の試食体験を行い、アルファ化米の調理方法がわかった。また、災害時の食事についてイメージを持つことができた。
- 火起こし体験ではグループごとに方法を工夫してチャレンジし、全グループが火を起こすことができた。さまざまな火の起こし方を知ることができたとともに、火起こしの難しさや火の扱い方も体験することができてよかった。

【課題】

- 当日は非常に暑く、校外で長時間の活動は熱中症の危険性があった。こまめな休憩や扇風機やテントなどで熱中症対策を行ったが、それでも危険性を感じたため、やむを得ず湯沸かしは中止し、ポットのお湯で非常食の試食体験を行うことになった。日程設定が課題。

和歌山さくら支援学校

実施日時

令和6年7月29日（月）・11月5日（火）

参加者

7月29日実施 生徒79名、教職員役30名 計109名程度
11月5日実施 生徒246名、教職員80名程度 計326名
和歌山北高校西校舎 生徒、教職員

実施内容

7月29日 非常食（アルファ米）の試食
11月5日 地震火災避難訓練（北高校西校舎合同）

7月29日（月）

ねらい

- 1 災害時における危機意識を高める。

主なプログラム

- 1 高等部の登校日（防災教育）にあわせて、給食事に非常食のアルファ米の試食を行う。

概要

- 1 午前中の授業の中で、災害時の食べ物や飲み物についての学習をする。
- 2 給食時に非常食（アルファ米）を実際に食べる。

参加者の感想

- ・水だけあれば作れることを初めて知った。
- ・意外と美味しかった。

成果と課題

【成果】事前に学習しておくことで興味関心をもつ生徒が多くいた。

【課題】今回は衛生面の関係で調理してもらった物を食べたが、災害時を想定した際に、実際に作ってみるといった活動が必要であると感じた。

11月5日（火）

ねらい

- 1 地震や火災などの災害時における危機意識を高める。

主なプログラム

- 1 地震が起こった際に、気をつけなくてはいけないこと。（防災ハンドブック活用）
- 2 火災が起こった際に、気をつけなくてはいけないこと。（防災ハンドブックの活用）
- 3 避難経路の確認。避難時に注意しなくてはいけないこと。

概要

- 1 地震が発生し、本校の調理室から火災が起こった想定。校内放送が流れる。
- 2 実際に避難し、行方不明生徒の捜索が行われる。

参加者の感想

・放送が鳴ったときは、音に驚きパニックになったが、先生の指示を聞いて落ち着いて避難することができた。

成果と課題

【成果】6月にシェイクアウト訓練を実施し、早い段階で避難経路等確認できていたのでスムーズに避難できた。

【課題】大規模災害を想定し隣接している和歌山北高校西校舎職員間での連携。

紀北支援学校

実施日時	令和6年8月21日（水）、令和7年1月14日（火）
参加者	生徒98名、教職員 41名、計139名
実施内容	避難所体験（パーテーションで寝る、簡易トイレ、新聞紙スリッパで歩行）、新聞紙スリッパ作り、アルファ化米作り、ペットボトルランタン作り、簡易担架体験

ねらい

- 1 体験学習を通して、防災への意識を高めたり高めたりする。
- 2 防災グッズの作り方を知る。
- 3 地震が起こった時の対応について自分の意見を話したり他者の意見を聞いたりする。

主なプログラム

- 体育館
避難所体験（段ボールパーテーションで寝る・簡易トイレ・新聞紙スリッパで歩行）
- フリースペース
簡易担架体験
- 教室
アルファ化米作り、試食・新聞紙スリッパ作り、ペットボトルランタン作り

概要

- 体育館の避難場所体験では、3つの項目を設置した。段ボールパーテーション体験では、室内に入りアルミブランケットを体に被せて寝る体験をした。簡易トイレではテントの中に設置されたトイレに座る体験をした。新聞紙スリッパ歩行体験では、決められたコースを歩行する体験をした。
- フリースペースでの簡易担架体験では、マニュアルに沿って、物干し竿に毛布をセ

ットして人を運ぶ体験をした。また、毛布のみで人を運ぶ体験をした。

- 教室でのアルファ化米作りでは、湯から作る生徒が多かったが、クラスで数名水から作る生徒がいた。その後、給食時に試食をした。新聞紙スリッパ作りでは、マニュアルに沿って新聞紙を折って作ることができた。ペットボトルランタン作りでは、まず台風や停電についての動画を視聴し、災害時の様子を伝えた。その後ペットボトルランタンを作り、停電時の暗い環境を設定し、ランタンの光をつける活動を行った。

参加者の感想

- 簡易担架では、最初怖かったのですが担架の作り方がわかると楽しくできた。
- 新聞紙スリッパ作りは、見本だけでは難しかったです。先生に手伝ってもらいました。
- アルファ化米作りでは、湯を入れて作ると柔らかく仕上がりに、おいしかったです。
- 簡易トイレのテントの中では、音や臭いが気になりそうで入りたくないと思いました。
- 暗い中で、ペットボトルランタンが光ると生徒が注目し、光を感じ取っていた。

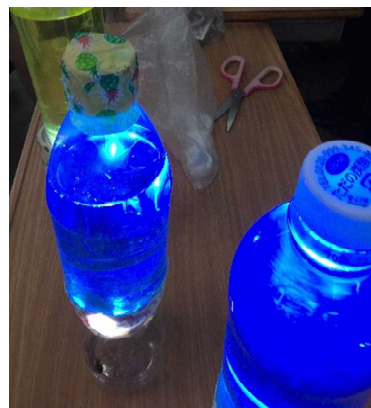
成果と課題

【成果】

災害が起きたときの対策法についての講義を受けるとともに、実際に段ボールパターション、新聞作り等に取り組んだ。具体的に制作活動に取り組むことで、より防災についての意識を高めることができた。

【課題】

今回の講義でたくさんのことを学んだが、実際に災害が起きたときに、落ち着いて行動に移せるかが課題となる。そのためには、学校で実施している避難訓練だけではなく、社会や総合的な探究の時間などの他教科でも繰り返し指導を行う必要性を感じた。



たちばな支援学校 高等部

実施日時	令和6年11月5日(火)
参加者	全校生徒204名(高等部64名)、教職員86名、地域住民等20名 計310名
実施内容	防災啓発DVD等の上映、地震津波避難訓練、避難生活体験

ねらい

大地震発生直後の適切な行動選択と、その後起こりうる災害から安全に避難し、避難所生活で過ごす知識、技能、態度を養う。

主なプログラム

- 1 地震津波避難訓練
- 2 各学年での避難所体験学習。

概要

- 1 各学年で防災啓発に関わる映像を視聴、避難所体験を実施。
- 2 全校児童生徒及び、近隣の保育園、老人ホームと合同避難訓練の実施。(校外へ避難)
- 3 自習通学生を対象とした広川町とJR事業「車両から避難誘導訓練」に参加。

成果と課題

【成果】

- ・防災啓発の視聴では、避難方法やマイバックの準備、活用について考えることができた。
- ・避難場所訓練では、定期的に取り組んでいることもあり、校外の避難場所へ落ち着いてスムーズに移動することができた。
- ・避難所での生活を想定した体験活動に取り組むことで、より具体的に防災を考えることができた。

【課題】

- ・今回の経験を受けて、さらに防災に関わる様々な取り組みを検討し、より専門的な知識や技術の習得をめざしていきたい。

みはま支援学校 高等部

実施日時 令和6年11月7日(木) 11:00~12:10

参加者 生徒14名、教職員16名、地域住民等1名 計31名

実施内容 災害時等に役立つロープワーク、簡易担架の作製及び活用体験
(講師:自衛隊)

ねらい

- 1 防災に対する意識を高める。
- 2 災害時における応急対応に関する知識、技能を学ぶ。

主なプログラム

- 1 ロープワーク(本結び・玉結び)
- 2 救急法「担架作製・搬送」
- 3 振り返り(アノートに記入)

概要

- 1 自衛隊和歌山本部御坊地域事務所の方に指導を仰ぎ、体験重視で緊急時の対応の一端を教わった。
- 2 簡単でほどけないロープの結び方、身の周りにあるものを活用した担架づくり等、役立つ技術を学ぶことができた。

参加者の感想

- ・ロープワークは、コツをつかめばおもしろかった。
- ・担架は、人が乗ると重かった。棒なしでも作れることが分かった。

成果と課題

【成果】

災害救助に当たる専門家からの直接で分

かりやすい指導に、生徒は、興味を持って活動に取り組むことができた。役立つ技が、比較的簡単に「できた！」ことで、自信につながり、防災意識のさらなる高まりにつながると感じた。

【課題】

学んだことを定着させるため、繰り返し取り組むことが必要。更に、できる応急処置を広げたい。

